
Devil May Cry another story

銃槍士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Devil May Cry another story

【コード】

N5896U

【作者名】

銃槍士

【あらすじ】

はるか昔、魔界が1体の悪魔によって封印されてから4000年。世界は科学と魔術の急激な発展によりかつてないほどの栄華を誇っていた。しかし封印が弱まっているのか、世界のあちこちで悪魔の出現が確認される。世界が不穏な空気に包まれている中、ある王国の王都に存在する1つの事務所を営む1人の男から物語が始まる。

The night carnival (前書き)

初投稿なので、どうかよろしくお願いします！

The night carnival

「huh・・・、数だけは揃えてきやがったな」

アークロム王国の王都ベルガードの末端に位置するスラム街の一角で、赤のラバーコートを着た男が30匹の悪魔に囲まれていた。男を囲んでいる悪魔は、ウコバクと呼ばれている下級悪魔である。悪魔には上級・中級・下級の3つの階級があり、どの階級に振り分けられるかは、その悪魔が持っている能力による。

下級悪魔とは文字通り最も弱い悪魔ということになる。がしかし、侮るなかれ下級とはいえ普通の人間では追い払うことさえ不可能なのである。ウコバクと呼ばれる悪魔は、見た目は痩せ細った子供のような体をしているがその顔は醜悪の一言に尽きる。単体ではさほど脅威ではないがこの悪魔は集団で人を襲うことで知られている。ウコバクは魔界の焔を灯した松明を手にして襲った人間を半生の状態まで焼き、ヤケドで苦しんでいる人の体を集団で貪る恐ろしい悪魔である。大抵は10匹で行動するのだが30もの数だと1つの村が一晩で壊滅するほどの規模であり、騎士団ですら何人か犠牲者が出てもおかしくないくらいの手強さなのだが、この男はまるで恐れではないなかった。

「数が多いのは大いに結構だが、雑魚はカンベンだぜ・・・」

男が発した言葉が合図とでもいうように、周りを囲んでいた悪魔が一斉に動き始めた。

それを確認すると、男は腰のガンベルトから2丁の拳銃を抜き放った。

左に黒の銃「エボニー」右に白の銃「アイボリー」を。常人では両手ですら扱えない大口径の銃を、悪魔相手に片手で扱うあたり男の力量のほどが伺える。

「C'mon! Babes! (来いよ! マヌケども!) Let's
rock! (ハデに行くぜ!)」

男は真上へと跳躍した。普通の人間ならば良くて1mと少しぐらいしか跳べないだろうが、その男は3m近い高さまで跳躍したのだ。男が立っていた場所へ大勢のウコバクが殺到したのだが、男が跳んだのが一瞬の出来事だったのでウコバク達は自分達の獲物を見失いきょろきょろしていた。

その間にヤツらにとつての獲物^{エサ}であるはずの男は、空中で逆立ちでもしているかのような姿でその有様を眺めていた。2丁の銃口をマヌケな悪魔に向けながら。

「ハッハー Chew on this! (コイツを食らえ!)」
逆立ち+回転しながら銃を乱射する姿は、サーカスでも観ているかのような光景である。そして真下に居るウコバク達に大量の鉄の雨が降り注いだ。

「Rain storm!」

一片の慈悲も無い鉄の雨は、1匹・また1匹と数を減らしていく。次々と悪魔を殺していく様は圧倒的としか言い様がなかった。

「あらよつと!」

男が着地するころには1匹のウコバクを残して全てのウコバクが息絶えていた。残ったウコバクも一瞬何が起こったのか分からなかったのだろう。暫くその場に立ち尽くしていたが、我に返ったのか一目散に逃げ出した。

その様子をアイボリーをクルクルと回しながら見ていた男は、ため

息交じりにこう呟いた。

「・・・マジで根性ねえな」

そして回していたアイボリーを、必死に逃げている悪魔に向ける。

「逃げてるトコ悪いんだが、オレのライブ（狩り）はタダじゃねえんだよ。・・・Time to die！（そろそろ死にな！）」

そしてマズルフラッシュとともにアワレな悪魔の頭が弾け飛ぶ。

「ヒュウ Jackpot！（大当たりだぜ！）」

そう言っつて男は直ぐにその場を後にする。

人間が恐れている悪魔ですら、この男を前にすると逃げ出してしまふ。そんな規格外な男の名は『ダンテ＝レッドグレイブ』

Devil May Cryという悪魔狩り専門の事務所を持つ、最強のデビルハンターである。

The night carnival (後書き)

どうでしたか？酷くなかったですか？感想をいただけるとうれしいです。

Blade orders (前書き)

今回は説明オンリーです。

会話はありませんが、読んでいただけると幸いです。

Blade orders

アークロム王国には、悪魔や魔獣から国民を守る騎士団が存在する。

その名も『魔剣騎士団』

なぜこのような名前なのかは、この国に伝わる古い伝説に由来している。

今から4000年前、突如として現れた魔界の王がこの世界を支配するために悪魔の大軍を率いて魔界から侵攻を開始した。

当時の人間達は、悪魔を退ける力を有していなかったためで征服されるのも時間の問題であった。

けれども、人の世は終焉を迎えることはなかった。

魔界の王の右腕とも称されるほどの力を持った1体の悪魔が、魔界の王に対して反旗を翻したのだ。

その悪魔はいち早くこの世界に来て侵略を開始していたが、その時に出会った1人の人間の女によって人に対する考えが変わっていった。

人は脆く儂いが、その心は美しさに溢れていると。

そして悪魔は人の為に剣を取る。

人の為に剣を振る。

その悪魔の一振りは千の悪魔を滅ぼし、遂には魔界の王すらも斬り伏せた。

そしてその悪魔は魔界を封印し、人々はその悪魔を

『スパイダ 悪魔でありながら誇り高き魂を持つ者 伝説の魔剣士』

と呼ぶようになった。

この出来事は伝説として語り継がれるようになり、4000年経った今でも知らない者はいないと言われている。

このことから、悪魔から人間を守ったスパイダにあやかつて『魔剣騎士団』と名付けたという。

スパイダは世界を救うだけでなく、まったく新しい技術『魔法』と呼ばれるものを人間に伝えた。

魔法は悪魔に対して有効であり、攻撃・防御にも使える非常に優れたものだった。

今では魔法は人間達によつて改良が行われており、『術式』と呼ばれる全く新しいものへと昇華していた。

術式の登場により騎士団の装備も大幅に変わっていた。

武器に術式を刻んで攻撃力を上げるのは勿論、目に見えて変わった点としては何といても『鎧』の廃止である。

現在、魔剣騎士団員の『鎧』に該当するものは彼らが着ている、一

見すると会社員が着ているような普通の黒のスーツがこれに当たる。こんなのが鎧の代わりになるのか、と思うかもしれないがその防御力は鎧の3倍以上である。

魔力を込めた繊維で織られ防御用の術式をふんだんに刻まれており、動きやすさも改善されているので騎士団員は全員このスーツの着用が義務付けられている。

騎士団には他の騎士と比べると、段違いの強さを誇る8人の騎士がいる。

彼らは『アークセイバーズ』と呼ばれ、騎士団で上位8人の強者が王直々に任命されることで名乗ることができる称号であり、他の団員や国民から尊敬と憧れの目で見られている。

騎士団には大まかに2つの仕事があり、1つはこの国の領内に出現した悪魔の討伐であり、もう1つの主な仕事はいわゆるデスクワークである。

内容は悪魔との戦闘で破壊された家屋などの報告書や、騎士団では捌ききれない小さな案件（悪魔絡みの）を悪魔討伐専門のギルドに依頼として提出するといったことが挙げられる。

騎士団の仕事場は演習や訓練など体を動かす所を騎士舎といい、デスクワークを行う所は騎士局と呼ばれている。

そしてダンテが『30体のウコバクを狩って欲しい』という依頼は、この騎士局内のある一室から要請されたものであった。

Blade orders (後書き)

今回はヒロインのあの人が登場します。

ちなみにあの人をこの作品に登場させたいがために、騎士団の鎧をスーツに変えたのは言うまでもありません(笑)

Archsaber(前書き)

DMCと全然関係ないけど、TVアニメ《Control》
(ノイタミナ)を知らない人は、YOU TUBEで検索してみ
て下さい。

ジェニファー姉さんが出ているので、
()

Archsaber

騎士局内 第8剣隊事務室

ダンテが悪魔と戦う30分前

騎士団にはそれぞれ王剣隊から第8剣隊までの8つの部隊があり、隊の長はアークセイバースが取り仕切っている。

ちなみに騎士局での頭脳労働は上級騎士が担当しており、下級騎士は上級騎士へなるためにひたすら騎士舎で訓練をしているのだ。

現在、事務室では大勢の上級騎士達が書類相手に格闘していたり掛かってきた電話に対して受け答えをしていたりと様々だ。

そんな彼らが使っている机の、さらに奥の方に一際大きい机が存在する。

それは彼らの長であるアークセイバーの仕事机であり、そこに座っている1人の人物が冒頭の戦いの原因となる電話をどこかに掛けようとしていた。

その人物は黒のパンツ・スーツ姿の淡い金髪がよく似合う25歳前後の女性で、棒付きキャンディーをくわえたまま電話を掛けていた。他の団員は皆ネクタイを着用（ネクタイにも防御用の術式が刻まれ

ているため)していたがその女性は着けていなかった。
挙げ句、シャツのボタンを上から2つまで開けているため、その豊
かな胸はより一層強調されていると言わざるをえない。

サングラスを掛けてはいるが、遠目から見ても美人に見えるのは彼
女の成せる業である。

『RRRRR / RRRRRRRM / R!』

「モシモシ? ダンテ? 生きてる?」

『・・・つい最近会ったばかりじゃねえか。・・・何だ? 仕事か?』

電話の向こうにいるダンテは、半ば呆れたように応える。

「冗談ジョーダン。アンタが死ぬはずないもんね。で、仕事の内容
なんだケド・・・」

女性は少し声のトーンを下げながら言う。

『デカイ仕事か? 最近は骨が無いヤツばかりだったからな、そーい
うのは大歓迎だぜ?』

嬉々として話すダンテが喋り終わると、口をつぐんでいた女性が申
し訳なさそうに、どこか開き直った感じでこう言った。

「ウコバク30名様ご案内~~~~、・・・テへっ」

『・・・パス』

清々しいほどの即答だった。

しかし女性も食い下がる。

「エ〜!?!?30だよ?殺り放題だよ?・・・当てにしてたのに〜」

『テメエは話を聞いてたのかよ?・・・とにかく、ヤツらじゃ話になんねえよ。・・・他当たれ』

まるで突き放すかの様にダンテは言う。

もはや電話を切りそうな勢いだったので、女性は矢継ぎ早に言葉をつなげた。

「ちょっと!?!? いつつも依頼の仲介してあげてるじゃん!・・・そんなコト言うんだったら、もう二度とそっちに仕事を回してあげないからっ!」

声が一際大きくなったからか、事務仕事をしている団員達が一斉に彼女の方を見た。

周りの視線に気付いたのか、問題ないとジェスチャーで知らせると声を落として話を続けた。

「普通のウコバクじゃないのよ。30匹で行動するウコバクなんて見たことないし。それに、腕の立つ騎士は皆この間の討伐の事後処理に忙しいし 新人に任せるには荷が重い案件だからダンテだけが頼りなの!」

ひとしきり理由を吐き出すと、電話の向こうでため息が聞こえたのは空耳ではないだろう。

『ギルドに要請すりゃ・・・って、そういえばお前ギルド嫌いだったな?』

「うん、・・・それに出現場所はスラム街なのよ？」

スラム街

このアークロム王国に住んでいる中で最も身分が低い者達が、日々を懸命に生きている場所である。

スラム街にも悪魔は出現するのだが、スラムに住んでいる人々は総じて貧しい生活を強いられているため、ギルドに依頼を出すことができない。

そんななか、ダンテはタダ同然の報酬でスラムの人々から依頼を受けるので、スラムの人間でダンテを知らない者はいないとさえ言われている。

当然、ダンテもスラムの人々と接する機会が多くなるため知り合いができる。

そうなる今回この依頼はダンテにとって無視できるものではなかった。

再度ダンテはため息をつき、電話の向こうで自分の返事を待っている女性に対して口を開いた。

『しょうがねえん、ホント！？』：話は最後まで聞けよ。いいか、コイツは貸した。もちろん、依頼料は別途もらうからな？』

「うん、貸しっるのが気になるけど...、この際気にしないわ。サ
ンキュ」

そうして自分の仕事が終わったら、ダンテの事務所に寄る事を告げると女性は電話を切った。

女性が電話を終えるのを部下である女騎士が確認すると、おもむろに尋ねてきた。

「例のデビルハンターですか？」

そう聞いてきたのは、第8剣隊副隊長のリリーナ・クラインだ。

「うん、前に話したでしょ？ギルドに所属していないスゴ腕のデビルハンターだって」

「ハイ…ですが、私はそうは思いません」

リリーナははつきりとした口調でそう言った。

ダンテに直接会ったことがあるのは、彼らの上官であるアークセイバーの女性だけなので信じられないのも無理はないかもしれない。しかしリリーナはそれとはまた別の、ダンテに対して敵対心にも似た感情を持っていた。

アークセイバーの女性はその心を読み取ったが、まるで気付いていないかのような雰囲気ですりりナに尋ねた。

「…どして？」

「なぜなら、まったくといっていいほど彼の名前を聞いたことが無いからです。それこそ、ヴェルヴォルン様からその名を伺って初めて知ったくらいですから」

騎士団は、常に腕の立つデビルハンターを把握している。人物に問題がなければ騎士団にスカウトするためであり、悪魔との戦闘は命懸けなので人員の補充は必要不可欠と考えられているからだ。

しかし、王国の領内全てに存在するデビルハンターを把握するのはほぼ不可能なので、騎士団と僅かに接点があり、（捌ききれない案件を依頼としてギルドに提出するから）王都に存在する悪魔討伐専門ギルド《サーベイジ・ファンク》（獰猛な牙）の本部に登録しているデビルハンターのみを調査の対象にしているのだ。

つまり、ギルド外のデビルハンターはまったく眼中にないのである。

「たしかに、アイツはギルドに所属してないからね……でも、そう考えると知りえなかったはずのアイツに出会えたアタシってラツキー？」

「…そうは言いますが、私たちからすれば納得がいきません！ だいたい、アークセイバーズ第8の剣であるヴェルヴォルン様に向かってタメ口で話すなど、不敬罪もいいところですよっ！」

気が付けば、周りの騎士達も仕事そっちのけでうんうんと頷いている。

その様子に、ほんの少し呆れつつアークセイバーの女性はこう続けた。

「そう言ってくれるのは嬉しいわ。でもダンはアタシの部下じゃないし、剣の腕だってアタシより上なのよ？」

そう言うと、周りの騎士たちが一斉にどよめき始めた。

「そんな…、ヴェルヴォルン様より強いなんて…」

リリーナも驚きのあまり言葉を失っている。

このままでは皆の仕事が今日中に終わりそうにないので、軽く咳払いをすると声高に言った。

「ハイハイ、ダンテについてはこれでオシマイっ！ 仕事はまだ終わってないんでしょ？ さっさとするっ！」

そう言うと、全員が思い出したかのように仕事を再開した。

現在時刻は7：45

ダンテへ電話を掛けてからすでに30分が経過しており、外は外灯や家々の明かりで照らされていた。

（ちなみにダンテは既に帰宅している）

「リリーナ？ アンタが余計なこと聞くから作業が止まっちゃったじゃない！」

「うっ……、申し訳ありません」

リリーナの謝罪を聞いて、《ヴェルヴォルン》と呼ばれていた女性は悪戯っぽい笑みを浮かべると、

「じゃあ、バツとしてアタシの分の仕事もやっついてね」

「えっ!?!」

「ダイジョブだって　ざっと見たところ、ハンコ押すのがほとんどだからリリーナでもできるって！」

そうして、自分の副官の返事（抗議）を待たずに帰る準備を始めた。

片手で持てる大きさの鞆に自分の荷物を詰め込むと、机に立て掛けていた《2本の剣》を両腰に差す。

右側に《断罪のヴェル》

左に《救済のヴォルン》

「……よし、それじゃ、お先です」

満面の笑みで彼女、ジェニファー《ヴェルヴォルン》サトウが部屋から出ていった。

アークセイバーズは王から賜った宝剣の名を自身のミドルネームとしており、彼女が賜った第8の宝剣は2本1組の珍しいタイプである。

故に、2本の名を合わせて《ヴェルヴォルン》と呼ばれているのだ。

ちなみに、残されたりリーナはというと渡された書類の多さになだれていた。

ところ変わってジェニファー、もといジーナが《Devil Ma y Cry》へと行く道すがら、彼女は近くのスーパーで買い物をしていた。

「うーん……。アイツ今回のことは『貸しだぞ』って言ってたし、夜も遅いからアタシが晩ご飯作ってあげればそれでチャラよね？」

誰に対してもなくそう言うとジーナは晩ご飯の食材を、どこか嬉

しそつに選び始めた。

Archsaber(後書き)

キャラ設定の話って、やっぱり必要ですかね？

よかったらコメント使って教えて下さると嬉しいです！

それでは、おやすみなさい！

(-.-)zzz

Dinner time(前書き)

これの次にキャラ設定の回を書こうと思っています！

ちなみに、ジエニファーさんがなぜ《ジーナ》と呼ばれているかというと、《ジエニファー》って何か長くて書きにくいなあと思ったので、ダンテがつけたニックネームだという設定を次回に書いておこうと思っています。

それでは！(・・)(・)

Dinner time

Devil May Cry

現在ダンテは状況が全く飲み込めていなかった。

確かに彼女はここに寄ると言っていたが、両手にいろいろな食材が入った買い物袋を持って事務所に入って来る姿は、ダンテの思考回路を混乱させるのに充分だった。

「…何してんだ、お前？」

「？ 見て分からない？」

そう言つて、彼女は躊躇うことなくキッチンへと向かう。

ダンテはそれはもう盛大にため息をつく、恐る恐る口を開いた。

「……………晩メシか？」

「ここまでして分からなかったら、オタマでぶん殴ってやるトコだったわ」

さらつとんでもないことを言うと、ジーナは調理の準備を始めた。

「晩メシを作るってのは分かったが、その理由が皆目見当つかねえよ。」

ダンテが至極もつともなコトを言うが、ジーナは調理の手を止めることはなかった。

しばらく考えていたが彼女は黙々と調理を続けていたので、ダンテは諦めるとともに冗談交じりにこう言った。

「……食べるのかよ」

《一・閃》

ダンテの顔の真横を、銀の光が通り過ぎた。

「あらやだ、滑っちゃった」

こちらを見ずに食材を煮込んでいるジーナは、どす黒いオーラを纏っているかのような雰囲気を漂わせながらそう言った。

「…Oh, that's fair…(…マジかよ…)」

ジーナが投げたのは何か、ヒントは《キレイ》モノである。

ダンテは、壁に刺さっていたソレを抜いてジーナの隣に立つと、

「悪かった。…オレが悪かったよ。もうふざけたコト言わねえから、機嫌直せよ。」

素直に謝罪した。

あれから機嫌が直ったジーナが、「することないなら手伝って」と言ったので、ダンテは渋々鍋の灰汁を取る作業を手伝った後、出来上がった料理を2人で食べていた。

「このカレー、美味しいな」

「当然よ。アタシが作ったんだから」

「灰汁を取ったのはオレだけだな」

「灰汁だけでしょ？…あんなのは子どもでもできるってば」

そんな他愛のない会話をしながらジーナが作ったカレーを食べていると、ダンテはあることを思い出した。

「そっぴゃ、何でココで晩メシ作ったのか聞いてなかったな」

ダンテはそもそもの疑問をジーナに問いかけた。

「あれ？ 言っただけじゃなかったっけ？」

「ハッ、無視したヤツがよく言う」

「仕方ないじゃない。ご飯作るのに集中してたんだから」

「Huh…、……で？」

「貸しだ、ってアンタ言ってたじゃない？だからそれを返しただけよ？」

確かに電話の中でそう言った記憶はある。だが、

「おいおい、オレが言った《貸し》の意味は《晩メシ作れ》じゃねえよ」

「はあ！？アタシみたいな《良い女》の手料理が食べれたのよ？充分過ぎるくらいだわ」

そう言いながらジーナは食器を片付けはじめた。

当のダンテはまだ何か言いたそうだったが、事務所の外に《ヤツら》の気配を察知した為、ジーナへの文句を飲み込んで代わりにこう言った。

「ヒュウ　食後のデザートにはヤケに多いな」

気付けばジーナも事務所の入口、もといその外側を見ているかのようだった。

「4、50くらいかしら？…まあ、何にしてもご苦労様ね」

ジーナが呆れたようにそう言うと、ダンテは壁に立て掛けていた1本の長剣を手に取った。

その剣は長剣と呼ぶより大剣と呼ぶに相応しいほどの大きさの両刃の剣であり、刃の根元には片面が人の骸骨、もう片方は骸骨に角が生えて口を開けているかのような彫刻が為されている。

身の丈ほどの大きさを誇る長剣を、軽々と背負う姿はどこかウキウキしているように見える。

「言つとくケド、銃は無しだからね？夜遅いんだから」

そう言いながら、彼女は2本の剣を両腰に差す。

右側に差した《断罪のヴェル》は燃えるような赤い剣身をしている両刃の片手剣で、左に差した《救済のヴォルン》は闇のような漆黒の剣身をした片刃の片手剣である。

「分かつてるさ。たまにはSword danceも悪くねえ」

言い終わるや否や入口の扉を豪快に蹴破ると、そこには軽く50は越える悪魔がいた。

その全ては《スケアクロウ》と呼ばれる下級悪魔であり、腕や足に鎌のような剣が取り付けられたずだ袋の力カシのような姿をしている。

「ハッハー コイツは食い放題だな！」

「ハア…、マズそうだけどね」

これほどの数に囲まれながらも2人は平然としていた。それもそのはず、ここにいるのは王国最強の騎士たちの中の1人と、今はまだ無名だが実力は王国最強と言っても過言ではないほどの腕前を持つ紅の狩人がいるのだ。もはや下級悪魔ではハナシにすらならない。

ある程度まで歩を進めると、ダンテがジーナに対して丁寧におじぎをしながらいこう言った。

「Will you dance with me? (僕と踊っていただけますか?)」

「Yes, with pleasure (ええ、喜んで)」

その答えが合図となり、全てのスケアクロウが動き始めた。まず2人を囲んでいた最前列のスケアクロウが一斉に斬りかかってきた。

ダンテが一番近くにいるスケアクロウ4体に狙いをつけると、背負っている長剣をスケアクロウ達の攻撃範囲外から横薙ぎに斬り払った。

「Move! (どけえっ!)」

4体のスケアクロウを斬り飛ばすと、左手でリベリオンを逆手に持

ち替えた。

その途端、剣身に紅い魔力が走り刃全体を覆った。ダンテはスケアクロウが最も密集している場所を見据えると、ニヤリと笑いながらリベリオンを振り抜いた。

「Over drive！（蹴散らせっ！）」

紅の斬撃は巨大な衝撃波となって、10体近くのボロ人形を消し飛ばした。

ジーナはダンテが動き始めるのと同時に反対側のスケアクロウへと向かっていった。

自分に一番近いスケアクロウに狙いを定めると、両腰に差した双剣をそれぞれ逆の手で同時に抜き放った。

xの字に斬り裂かれたスケアクロウが崩れ落ちていく様を尻目に、今度は左右から飛び掛かってきたヤツらに狙いを定める。

足に取り付けられた剣で斬りかかってきた2体の攻撃を半歩後ろに下がるような動きで躲すと、着地したスケアクロウ2体の頭の部分に断罪と救済の剣を突き立ててその場でバレリーナのように回り始めた。

2体のスケアクロウは遠心力によって体が浮き始め、足の剣で他のスケアクロウ達を次々と斬り裂いていく。

「これで……オシマイっ！」

ジーナは回転を止めると、突き刺していたスケアクロウ達の頭に強力な慣性が働き、無惨にも頭が千切れていった。

ジーナが中心となって巻き起こした斬撃の竜巻は20以上のスケアクロウを巻き込んでおり、残りは10と少ししか残っていなかった。

「フフツ、Too easy（楽勝ね）」

そう言ったジーナは妖艶な笑みを浮かべていた。

残り10体ぐらいになると、ダンテはリベリオンを背負って悪魔達と戦っていた。

いや、この場合は《防御し続けていた》、というのが正しいだろう。ジーナの活躍によって、スケアクロウの数が瞬く間に減ったことを確認すると、ダンテは何を考えたのか突然攻撃の手を止めたのである。

そして、今現在袋叩きにされているような場面が繰り広げられており、端から見ればかなりピンチな状況なのだが…、

「ハッハー Hey! C・mon! (ほら! 来いよ!)」

なぜか楽しんでいた…。

よく見ると攻撃が当たる瞬間に、薄い魔力障壁が張られているのが確認できる。

これによって、ダンテは護られているのだが、実はこの行為にはキチンとした理由があった。

「Huh……そろそろだな」

そう言うと、向かってきた1体のスケアクロウに向かって掌底を放った。

「Release!」

瞬間、スケアクロウの体が弾け飛ぶ。

ただの掌底なのに何故これほどまでに強いのかというと、

さきほどまで行なってきた防御行為が密接に関係していた。

ダンテは攻撃を防いでいるときに、ある魔術を使用していたのだ。

それは古より伝わる究極の攻防一体型魔術

ロイヤル・ガード

敵の攻撃を無力化するだけでなく、その攻撃の威力を《ロイヤル・フォース》と呼ばれる力に変換・蓄積することによって爆発的な破壊力を生み出す効果を持つ。

そして今のダンテには充分過ぎるくらいのロイヤル・フォースが蓄積されていた。

「おい、ジーナ。お前の術式でコイツらを一ヶ所にまとめてくれ。一撃で終わらせてやるよ」

「分かったわ。……《大いなる疾風、悪しき者どもに烈風の枷を与え賜え……シルフィード・タック！》」
スケアクロウ達を囲むようにして烈風が吹き荒れる。

その様子を眺めながら、ダンテはリベリオンを抜き、蓄めに蓄めたロイヤル・フォースをその剣身に流し込む。
そして、黄金に光り輝く愛剣を構えるところ言った。

「This baby sure can peck a punch.
ch.（お仕置き時間だ）」

無数のスケアクロウとの戦闘が終わり、時計を見ると既に22時を越えていた。

「うわっ！？もうこんな時間？」

「そうだな。…家まで送ってやるっか？」

ダンテにそう言われてしばらく考えていたが、ジーナはある結論に達したようだった。

「……………泊めてくれる？」

「本気で言ってるのか？」

「……………割とマジかも」

「ちなみに、ココにはベッドは1つもねえぞ？」

「ええっ！？じゃあドコで寝てるのよ？」

「そのソファアで」

そう言ってダンテは、ラウンジにある大きめのソファアを指差した。

「じゃあダンテはいつも通りそこで寝ていいよ。アタシはその上に乗って寝るから」

「…今、自分がとんでもねえコト言ったのを分かってんのか？」

「……………それなりに／＼／＼／」

「自分で言っただけじゃあねえよ……………分かった、ジーナはソファで寝る。オレはその机に座って寝るから」

「えっ！？でも、それじゃダンテに悪いわ」

「気にすんなよ。それと……………これを体に被せとけ」

そう言っただけでダンテは自分のコートを脱ぐと、ジーナに投げ渡した。

「布団代わりだ。無いよりマシだろ……………」

「ダンテ……………」

「…ほら、騎士団って朝早いんだろ？…とっくと寝るぞ？」

「…うん……………おやすみなさい」

「……………ああ……………おやすみ」

そう言っただけで、ダンテは電気を消した。

「（ダンテ……………ありがとう）」

そうして、いろいろなことが起きた1日が静かに終わっていった。

Dinner time (後書き)

どうでしたか？

今回は結構長くなってしまったんですが、読みにくくなかったですかね？

次回は設定について書いていこうと思っています！

最後に一言……

雨うぜえ！

Details (前書き)

どうもこんばんは！

今回は設定を説明する回ということですが、自分が考えている設定を文字にするのって難しいッスね

この物語の中に出てくる用語の説明などは次回くらいに書こうと思ってます。

それでは、どじろー！

Details

ダンテ＝レッドグレイブ

25歳

言わずと知れた本編の主人公。

王都の外れ、スラム街との境に便利屋《Devil May Cry》を構えているスゴ腕のデビルハンターであり、王都に存在しているデビルハンター達の中では唯一ギルドに所属していない変わり者である。

普段はクールな性格だが悪魔との戦いになると気分がハイになって悪魔をからかうような口調へと変わる。

誰にも知られていないが、ダンテは悪魔と人間との間に生まれたハーフで、父親はかの伝説の魔剣士スパードである。

ダンテは、その偉大な父親から大切な人を守る術として4つの古代魔術を学び、慈愛に満ちた母親からは人を愛する心を教わった。

ダンテは父から教わった4つの魔術を自分用に術式としてカスタマイズしており、それぞれ、近接攻撃に特化したものを《Swordmaster》、スピードに重きを置いたのを《Tricks》、遠距離攻撃に特化したものを《Gunslinger》、そしてあらゆるものを護り、あらゆる敵を打ち砕く《Royalguard》

以上、この4つの術式を駆使して日々悪魔を狩り続けている。

ジェニファーとは、スラム街で悪魔と戦闘中に偶然出会いその場で共闘し、その際に互いの実力を認めあい今では友人のような関係を築いている。

ジェニファーのことを《ジーナ》と呼んでいるが、そう呼びはじめた理由は単に呼びにくいただけということである。

ジェニファー＝サトウ

アークセイバーとしての名は《ヴェルヴォルン》

25歳 独身

本編のヒロイン。

8騎族の中の、《双剣のサトウ家》の令嬢であり、第8剣隊の長を務めるアークセイバーの女性。

スラム街に出現する悪魔達を軽視している騎士団の対応に不満を持つており、スラム街の悪魔を単身で討伐するために赴いた先で悪魔と戦闘中のダンテと出会う。

その後、スラム街の現状及びダンテが街の治安を守っていたのを聞くと、ダンテの人柄に好感を持つていった。

現在は友人のような関係を築いており、少しだけだが異性としても意識し始めている。

容姿は淡い金髪に碧眼、常にサングラスを着用し棒付きキャンディくわえた美人である。

性格は基本的に明るく、人当たりがいいのだがあらゆる《理不尽》なことを極端に嫌っている。

持ち前の明るさからか、部下からは慕われておりアークセイバーズの中で唯一の女性騎士でもあるので、一部の国民達がファンクラブを作るほどの人気がある。

自身が使用する剣術はサトウ家に伝わる《桜火双刃流》と呼ばれるもので、双剣の初代アークセイバーであった《カゲツキIIサトウ》が考案した剣術である。

ちなみに、ダンテが呼びにくいというだけで付けたニックネームである《ジーナ》という名は、本人はとても気に入っているようである。

D e t a i l s (後書き)

厨二っぽいのは認めますです

小説って難しいな

b e f o r e e m e r g e n c y (前書き)

言い忘れてましたが、この物語のダンテは初代のダンテに4の服を着ている感じですよ！

ではでは。

b e f o r e e m e r g e n c y

翌朝

ラウンジにある窓から一条の光が射し込む。

それはこの世界に生きる全ての生物に今日という1日の始まりを告げる光である。

「ふああゝ。……もう朝？」

そう言つて、ジェニファーは軽くけのびをするとまだ眠たそうな目で辺りを見回した。

そうして彼女の目についたのは、一際大きな仕事机に足を投げ出して眠っている黒のインナーに赤い装飾が施された裾が印象的な黒の革パンツを着ている男性だ。

ジェニファーは、寝起きの体を引きずるようにして男性の元へ歩いていく。

ダンテは普段からは想像もつかない様なあどけない寝顔をしており、彼女はその寝顔を15秒くらい眺めていたが、普段は見る事が出来ない彼の表情が見れて満足したのか、彼女は優しげな笑みを浮かべていた。

彼女はその後、シャワーを浴びてから朝食を作っていた。

現在時刻は7:00

鼻歌交じりに朝食を作り終わると、1枚のメモ用紙にメッセージを書き残して事務所をあとにした。

「…行つてきます」

Devil May Cryから出て真っ直ぐ歩いていくと、かなり大きな通りが出る。

そこは《スパイダ・ストリート》と呼ばれており、剣のような装飾がなされた街灯が均一に立ち並んでいた。

通りを走る車の数はまばらだが、歩道を歩く人々は多かった。

その殆どは通勤・通学者であり、皆同じ方向に向かって歩いていた。

アークロム王国は科学と術式が他の国々よりも発達しており、移動魔術を装置化することに成功、国内に存在する受信装置がある場所

なら送信装置集会所から一瞬で行くことができるようになったのである。ムーブメント・ブレイス

受信装置は会社や学校などの主要施設に設置されているので、朝の通勤・通学の時間帯は皆を**目指す**。ムーブメント・ブレイス

その真つ只中にジェニファアの姿があつた。

「あつ!? ヴェルヴォルン様だ! おはようございますっ!」

「おはようございますっ! ヴェルヴォルン様!」

「~~~~ツ! ... 相変わらず美しい!」

などの様々な言葉を道行く人々から絶え間なく掛けられていた。

ジェニファアはアークセイバーズの紅一点であり、明るく気さくな性格も相まつて国民からかなりの人気がある。

また彼女は抜群のプロポーションを持っており、主に男性から絶大な人気を博している。

掛けられる言葉に対して丁寧に戻しながら歩いていくと、いつの間にか目的地へと着いていた。

《ムーブメント・ブレイス》

そこは送信用の巨大な装置が階段状に設置されており、まるで何かのモニュメントのようにも見える。

騎士団関係の送信装置は上層部に位置している。

「はあく。…あんな上に置いといて何の意味があるのよ……」

ムーブメント・プレイスを登るには備え付けのエスカレーターがあるのだが、騎士団関係の装置はかなり上に位置しているので昇るのに時間がかかる。
昇りきるのを待つ時間がジェニファーには退屈だった。

騎士団関係の階層に着くと、彼女は騎士局への送信装置へと向かう。

「IDを入力と……、よし、転送開始！」

ジェニファーは青白い光に包まれると跡形もなくその姿を消した。

D e v i l M a y C r y

「ふう、…机で寝るのも案外イケるな」

そう言ってダンテは目覚めた。

「ジーナは……、行ったか？」

辺りを見回すと、テーブルの上にラップのかかったサンドウィッチと一枚のメモがあるのを確認する。

メモ用紙を手に取ると、内容を読み始めた。

《ダンテへ》

おっは〜！

朝ご飯はアタシの愛がこもったサンドウィッチです。
残さず食べるように！

P・S〜

寝顔、ごちそうさま

「…あの野郎…」

ダンテはメモを読み終わると、サンドウィッチにかぶりついた。

「……まさかピザ以外の料理が美味しいと感じるとはな」

そう呟くと黙々とジェニファーが作ったサンドウィッチを食べ続けた。

騎士局内

「おはようございます、ヴェルヴォルン様」

ジェニファアの副官であるリリーナが彼女を出迎えた。

「あら？ ずいぶん早いよね？」

「……昨日の書類が予想外に多かったので完徹でした……」

昨日ジェニファアは自分の仕事をリリーナに押し付けてダンテの所に行ったので、残された彼女は徹夜で書類を処理していたのだ。

「アハハハ…… ゴメンなさい」

「いえ、私にも非がありましたので……。ですが、これからは気を付けていただけると助かります」

疲れはてた顔でそう言ったりリーナは自嘲気味に笑った。

「……………！ね、ねえ？コーヒーおごってあげよっか？」

「……………ありがとうございます」

そんなむなしいやりとりをしていると、観測部隊の制服を着た男性が鬼気迫る表情でこちらに向かって走ってきた。

「た、た、た、大変ですっ！ ヴェルヴォルン様！」

冗談とは思えない雰囲気からか、ジェニファアの表情は騎士のそれに変わっていた。

「どうした？…まずは落ち着きなさい」

「ハ、ハイっ！はあっ、はあっ。…ありがとうございます、もう大丈夫です」

そう言って観測部隊の男性は噛み締めるように言葉を続けた。

「エルド平原が、一瞬で焼け野原になりました」

「なんですって！？」

エルド平原

アークロム王国の西に位置する最大の牧草地帯であり、王国の畜産業の60%を占める国内有数の畜産地域である。

「……原因は？」

ある程度の予想はついていたのだが、ジェニファーはそう聞かずにはいられなかった。

「悪魔です！その数は1体でヤツが現れると同時に……エルド平原が全焼いたしました」

ジェニファーは思考を張り巡らせていた。
たった1体で広大なエルド平原を一瞬で全焼させることが出来る悪魔はそういない。
ついに来たのだ。

上級悪魔が……

b e f o r e e m e r g e n c y (後書き)

デビルメイクライで炎の悪魔っていったら……

あの長生きなオッサンしか思い浮かばないですよね？

それではまた！

(・ ・)

Emergency(前書き)

遅れてしまいすみません！

実は自分ケータイで投稿しているのですが、さ行の文字を打つときに誤って全ての動作をぶった斬るあのボタンを押すということをも3回もしてしまい、心が折れそうでした。

つくづく思いましたよ、パソコンの方がめっちゃいいって

Emergency

騎士舎 会議室

現在、魔剣騎士団は第1級警戒体制を発令中であり王都を囲んでいる防壁に設置している結界装置が作動している。

そして、騎士舎の中にある会議室にアークセイバース全員が集合していた。

そのそうそうたるメンバーを前に、観測部隊の隊長が今回の事件を引き起こした悪魔について説明していた。

「皆さんもご存知の通り、我々観測部隊はアークロム王国領内を観測塔から24時間体制で観測し続けています。そしてAM7時45分に、エルド平原にて強力な魔力反応を確認、すぐさま観測機を飛ばしました。」

これからお見せする映像は観測機が破壊されるまでの映像です」

「破壊だ！？ その悪魔が攻撃を仕掛けてきたと言っのか!？」

そう声を荒げたのはアーケセイバーズ最年長の、リーグル《フォルタス》ラグハイムである。

短く刈り上げた黒髪に白髪が所々目立った屈強な大男だ。

彼が扱う第3の宝剣は全長3メートル、剣身の幅は1.5メートルを誇る両刃の大剣^{フォルタス}。

言い伝えによれば、初代ラグハイムはこの《フォルタス》を用いて全長100メートルの魔竜^{リースホッグ}の首を僅か一振りで斬り落としたと言われている。

リーグルは既に60歳を越えているのだがこの《フォルタス》を片手で振り回すあたり、引退の2文字はまるで眼中にないようだ。

「…いえ、攻撃というよりも観測機が『耐えられなくなった』というのが適切かと思います」

「?????」

リーグルは首を傾げた。

「観測機はあらゆる場所で観測できるように作られています。

それこそ北はゼロム凍土、南はカシー砂漠、といった具合に。

さらには観測機本体に環境制御術式を施しているので、如何様な劣悪な環境でも充分耐えられるはずなのですが……………」

「耐えられなかった、と?」

そう確認するかのように問いかけてきたのは、燃えるような赤い髪を後ろへ撫で付け、掛けている眼鏡の奥に光る切れ長の瞳が印象的な20代の男性である。

イスカ《シン》アストルティン

年齢19歳という若さでアークセイバーズとなった、天才との呼び声高いアストルティン家の次期当主である。

彼が扱う第7の宝剣である《シン》は8つの宝剣の中で唯一の変形機構を持っており、反り返った両刃の長剣が逆方向に展開するとまるで死神の鎌を思わせるような姿へと豹変する。

そんな《シン》を携えて悪魔を殲滅する見た目から《タナトス》という異名がつけられているのだが、本人はあまり快く思っていない。

観測部隊の隊長はその問いかけに頷くと言葉を続けた。

「はい。…おそらくエルド平原一帯の温度は300 を超えています。

よって観測機が壊れた原因は、あまりに高い温度に耐えられなくなったと考えるのが妥当だと判断いたしました」

「…それほどの高温がエルド平原一帯で発生しているのなら、それが《邪界》の影響によるものと見て、まず間違いないでしょうね」

ジェニファーはとても面倒くさそうな顔でそう言った。

《邪界》

それは悪魔たちがこの世界での活動をより良くするために、自身の

住んでいる魔界での環境をある一定の範囲内で再現させる悪魔が使用する結界の名称である。

その邪界の範囲がエルド平原全域に及んでいるということは、今回の悪魔がかなりの魔力を持っており一筋縄ではいかないということを暗に示していた。

「まったくもってその通りです。……では、これから観測機が壊れるまでの映像をお見せします」

スクリーンに映ったのは、炎。

炎、炎、炎、炎、炎、炎、炎、炎、炎、炎。

そこは、ついさっきまでは緑溢れる平原だったのだが、既に辺り一面炎しか見ることができない有様だった。

そして、一切の生物の生存を許さないかのように燃え盛る紅蓮の中でそれは立っていた。

黒々とした体躯に4本の足、背中からは翼のような炎が噴き出し、筋骨隆々とした上半身に手に持っている剣のような鈍器が特徴的な悪魔がそこに映っており、アークセイバースの面々は皆息を飲んでいた。

すると、スクリーンに映っている悪魔がこちらに気が付いたのか、カメラと視線が合ったかと思うとそこで映像は終わっていた。

映像が終わると、ある人物がこう言った。

「この映像を見る限りでは、炎獄の悪魔であると見て間違いない。
…問題は、300の中でどうやって戦うのか…だな」

そう言ったのは、アークセイバーズの中で最強と謳われている騎士ソルド《グラム》アーティスその人だった。

腰まで伸ばした茶髪に甘いマスクが印象的な男だが、その実力は歴代のアークセイバーズを凌ぐほどであり現国王からの信頼も篤い。彼が扱う第1の宝剣ケラムは何の変哲もないただの両刃の長剣だが、その斬れ味は想像を絶するほどであり、斬れ過ぎるが故にソルドほどの実力者でなければ何も斬れないと言われている業物である。

しかし、完璧な人間のように見える彼にも欠点があり、その欠点とは重度の女好きであることが挙げられる。

余談ではあるが、

今までに口説いた女は数知れず、その甘いマスクから、誘われた女性には誰一人断ることはなかったのだが、つい最近にジェニファーを口説いたが全く相手にされなかったので自分の思い通りにいかなかった初めての女性として、ソルドは日々彼女にプロポーズし続けている。

そんな彼も悪魔の事となると、普段の女たらしの雰囲気から一変して歴戦の騎士の雰囲気へと変わる。

ソルドが指揮を取る第1剣隊《正式名称 王剣隊》は他の隊とは任務が異なり、常に王都の警備及び国王の守護という特殊な任務を請け負っている。

それはまさに国王の信頼の表れであるのだが、ソルドが悪魔の討伐のために王都を離れる際は議会と国王の承認が必要になる。よって、今回は悪魔の出現場所がエルド平原と遠いのでおそらくソルドの出陣は無いと考えられている。

一瞬の沈黙を破ってある騎士がこう言った。

「そう言えば、機術研究所で邪界を無効化する装置を開発したというのを聞いたのだが？」

そう言ったのはアークセイバー第5の剣アルフィード《リグヘルト》
《マーキスだった。

彼は短く切り揃えられた青い髪に、少し目立つアホ毛が特徴的な30代の男性である。

彼の扱う第5の宝剣は切っ先が3つに別れた氷の魔剣である。
リグヘルト

その問いかけにソルドは頷くと、

「そのことについて報告は受けている。…確か対邪界用結界装置《A-D-Bシステム（アンチ・デモンズ・バリア）》という名前の腕輪型の装置だと言ったか？しかし欠点もあるらしく、込められる魔力は限りがあり、それは人間の生命エネルギーを感知して半径100メートル以内にいる人間1人1人に結界を張るため、範囲内にいる人間の数が多いと魔力が切れる時間が早まると言っていたが…」

そこでソルドは言葉を止めた。

つまり強大な悪魔と戦うのに、自らの隊を率いて戦うことができず数少ない人数である悪魔と戦わなければならないことが確定したのである。

彼らは上級悪魔との戦闘経験はあるのだが、今回の悪魔は明らかに格が違っていたのだ。

こちらの圧倒的な不利であるのは間違いないので、会議室にいる誰もが浮かない顔をしていた。

ただ1人、彼女を除いては。

再び沈黙が訪れたが、ジェニファーは軽く深呼吸をすると意を決したかのように手を挙げた。

「アタシが行くわ」

その瞬間会議室は騒然となった。

「何だと！？本気なのか？」

「そんな！？危険すぎます！」

「それならば、私が行こう！」

そんな言葉が他のアークセイバー達から次々とかけられ、ジェニフアーは苦笑いを浮かべていたが、

「そう言ってくれるのは嬉しいケド、最初に報告を受けたのはアタシなのよ？」

魔剣騎士団の任務遂行の選定基準は、最初に悪魔出現の報告を受けた隊が優先的な任務遂行権を持つ、ということが騎士団の規則に定められている。

よって今回は最初に報告を受けた第8剣隊のジェニフアーが任務遂行権を持っていることになる。

「しかし、いくらお主といえども無事では済まんぞ！」

そうリーゲルが声を荒げたが、

「？誰も1人で行く、なんて言っていないでしょ？」

そうやって彼女は首を傾げた。

「では、誰を連れていくのですか？」

そうイスカが問いかけると、独身のアークセイバー達が急に服装を整え始めた。

アークセイバーズの中には既婚者はちらほら居るが（リーグルやアルフィード）、その大半は独身なのでジェニファーに少なからず好意を抱いている者がほとんどである。
なので、

「私が行こう！」

「いや、俺様が行こう！」

「ならば私が！」

挙げ句の果てには騎士団最強のソルドまでもが、

「仕方がない。俺が行こう！」

と言いだす始末。

ジェニファーは大きくため息をつくところ言った。

「ゴメンね？相手はもう決まってるから。それとソルドは論外ね」

「な、何故だ！」

「ソルドの場合、例え王が承認しても議会の連中が承認するはずないでしょ？それ以前に時間がかかるから」

王国最強の騎士の反論を彼女はバツサリ斬り捨てた。

彼女は他のアークセイバー達を単なる仕事仲間としか認識していなかったため、彼らのアピールはまるで眼中に無かったのだ。彼女が異性として意識しているのは世界でただ1人、あの男だけだった。

「討伐にはアタシと民間からの協力者の2人で行くわ」

そう彼女が宣言すると、会議室の中に居るアークセイバー達の心が一瞬だけ1つになった。

「……………な！？」「……………」

彼らは一瞬フリーズしていたがジェニファーは、

「じゃあ、研究所にそのナンタラ装置つてのを借りて、民間の協力者をそのまま拾って行くから防壁の結界の解除をヨロシクね」

そう言って彼女は軽い足取りで会議室から出ていった。

ジェニファーが出ていった後、フリーズ状態から復帰した彼らは民

間の協力者について話し合っていたが、それまで黙っていたソルドがおもむろに立ち上がったので場は一瞬で静まり返った。

「…どのドイツか知らないが、ジェニファーにかすり傷1つでも負わせやがったら…ブチコロシテヤル」

額に血管を浮かべて体をプルプル震わせながらソルドはそう言った。

一方のジェニファーはというと、彼女の部下達に事の顛末を伝えて機術研究所へと向かって行った。

研究所に着くと、ここの所長が彼女を出迎えてくれてそのまま腕輪型装置の説明を始めたのだが、

(チラッ、チラッ)

説明の最中であるにも関わらず、ジェニファーの胸をチラチラ見ているのである。

「(チラッ、チラッ)こ、この装置を起動するには、(チラッ)ウエ、ウエ、WAKE UPと言う(チラッ)必要があります。」

いい加減ぶん殴りたかったのだが、話が進まないなのでジェニファーは我慢して聞いていた。

「(怒)ふーん？2人で戦闘する場合はどれくらい保つのかしら？
(怒)」

「おそろく、(チラッ)(1時間は保つかと、(チラッ)(思います)
チラチラッ)」

必要なことは全て聞けたので、ジェニファーはそのセクハラ所長に
お礼を言いながらおもいつきりぶん殴った。

Devil May Cry へと向かう道すがら、ジェニファー
はダンテが言っていたある言葉を思い出していた。

『いいか？コイツは貸しだからな？』

『オレが言った《貸し》の意味は《晚メシ作れ》じゃねえよ』

今回、何故ジェニファーがダンテと2人きりであの炎獄の悪魔を討

伐する事を決めたのかというと、まずは今回の戦闘に観測機を必ず飛ばしてくると思われるので、アークセイバーズにダンテの実力を知らしめることができるというのが1つ目の理由である。

2つ目の理由は、アークセイバーズの力を軽く凌駕するダンテを自らがアークセイバーに推薦し、自分はアークセイバーになったダンテの副官になることである。

これは、仕事も私生活もダンテと一緒にいたいという彼女のささやかなワガママである。

そして、ついさっき思い出したダンテへの借りについては、彼が『最近の悪魔は骨が無いヤツばかりだ』と嘆いていたので、今回の悪魔の出現は充分借りを返すに値するだろうとジェニファーは考えていた。

「フフフっ アイツ、泣いて喜ぶかしら？」

そう呟くと彼女は目的地へ向かって走っていった。

「ダンテっ！」

そう言ってジェニファーは事務所の扉をおもいきり開いた。

そして、彼女の目の前にその男が背を向けて立っているのが目に映った。

その背に骸骨の長剣を背負い、両手に持っている白と黒の鍵盤を回しながら。

そして、2つの鍵盤を腰のガンベルトに納めるとその男が背を向けながらこう言った。

「Huh……Took your time? (遅刻だぜ?)」

「何よ?…アタシはダンテを楽しいパーティーに誘いに来てあげたつてのに、そっちは最初から行く気満々だったってコト?」

彼女は苦笑いを浮かべながらそう言った。

「ジーナがオレントコに来るってのは、なんとなく分かってたから

な
」

ダンテは振り向きながらそう言った。

「相手は炎獄の上級悪魔。…アナタのお気に召すかしら？」

「HA！ …… S o s w e e t （最高だぜ）」

そう言うと、2人は歩き始めた。

炎獄と化したエルド平原。

そこに佇む炎獄の覇者を討ち倒さんが為に。

Emergency (後書き)

ども、銃槍士です！

前書きを読んで下さった方はお分かりかと思いますが、今日まで心がめっちゃ折れそうだったので、アークセイバース全員を紹介する事ができませんでした
次の次あたりに紹介しようと思っっていますので、どうかご容赦ください

話は変わりますが…お、お、お気に入りに登録件数が増えているだとおおお！？

ホントにありがとうございます！

心が折れかかった自分には何よりのバイタルスターです！
マジでありがとうございます！

Truth's End of flame 前(前書き)

スランプ……長かった。

Truth \ End of flame 前

エルド平原

そこは数多の酪農家が乳牛、肉牛問わず放し飼いにしている王国きつての放牧地である。

そこから取れる畜産品は王国の経済の大部分を支えており、欠かすことのできない要所の1つとなっていたのだが……

「Oh…、Great・(こりゃスゲーな)」

「ヒドイ、何よコレ？」

今ダンテとジエニファアは燃え盛るエルド平原の1歩手前にまで来ていたのだが、平原の有様をその目で直に見た際の感想を無意識に述べていた。

「それにしても暑いな。平原の側に居るだけでもこの暑さだったのに、直接足を踏み入れたら消し炭になるんじゃないのか？」

「確かに暑いのは認めるわ。けど、そうならない様にこれを借りて

来たんだからね?」

そう言つてジエニファアは左手首に着けている銀色の腕輪をダンテに見せた。

「A・D・Bシステム（アンチ・デモンズ・バリア）ねえ？ ホントにコイツが邪界を打ち消してくれるのかよ？」

「打ち消してくれなきゃ困るつての。まあ成るようになるでしょ？」

そう言つて彼女は空を見上げて観測機が飛んでいるのを確認していると、自身のケータイに電話が掛かってきた。

「GIRRRRRRIN、GIRRRRRIN」

「古くせえな、黒電話かつての」

「うっさい」

ダンテのからかいを適当に流すとジエニファアは電話に出た。

「ハイ、こちらヴェルヴォルン。現在私達はエルド平原に到着。これからターゲットに接触する予定なんだケド…、ソッチは何か動

きはあった？」

『こちらグラム。無事に着いたようだな？今現在ターゲットに動きは無いが警戒を怠るな。ヤツめ、どういう訳か君達が平原に到着した時からずっと、君達の居る方角を向いている。恐らくだが、ヤツは君達の存在に気付いているぞ？』

電話の相手は、観測機から送られてくる現在の平原及び悪魔の映像を観測部隊の本部から見ているアークセイバーの1人、ソルド《グラム》アークティスだった。

「…そう。となると奇襲は無理ね。まあ、ダイジョブでしょ」

『その自信はどこから来るんだ？…まあいい。それよりも君が連れている民間の協力者なんだが、足手まといになるようなら見捨ててくれて構わないぞ。そんなヤツの為に君が危険に晒される必要は無いんだ』

確かにジェニファアは王国最強のアークセイバーであり、もしも今回の戦闘で再起不能になりでもしたら王国の損失は計り知れない。ソルドの考えは他のアークセイバー達の考えと同じであった。

観測機からの映像でダンテの顔を見るまでは民間の協力者、つまり悪魔を狩るギルドに所属する最低でもAランク以上のハンターであろうと結論づけていたのだが、顔を確認した後ギルドの所属ハンターの一覧にダンテが存在しなかった為、無名のハンターであると判明したのである。

ソルド達からして見れば、ジェニファアの危険度が当初見積もっていたものよりも数倍にはね上がったと思っていたので、彼女への助言はある意味正しいのだろう。

その協力者が弱ければ、の話だが。

「フッフッフ　心配し過ぎだつてば。そんなことにはならないわよ？」

『しかしっ！！』

「それに言い忘れてたケド、…アイツはアタシより強いのよ？」

『ッ…？』

電話の向こうのソルドは驚愕で声も出ないようだ。

「それじゃあ、そろそろ始めるからよく見ておきなさい」

『P.H.H.』

ジェニファアは電話を切ると、電話の最中ずっと待っていたである。うだんテに向き直った。

「お待たせっ そろそろ始めよっか？」

「ああ、さっさと始めよーぜ？と、言いてえ所だが俺から1つ提案がある」

「何？」

「今回は俺1人で殺る。ジーナは離れて見てろ」

「ちゃんとした理由があるんでしょうね？無かったら張り倒されても文句は言えないわよ？」

いきなりのソロバトル宣言にジェニファアの機嫌が徐々に悪化していくが、ダンテはまるで気にした様子も無くこっ続けた。

「オメーのその腕輪があるから、邪界の中で戦えるんだろ？」

「そう説明したじゃない？もう忘れたの！？」

「俺が言いてえのはそうじゃねえよ。……その腕輪が今回の戦闘に耐えられるのか？って言いてえの」

「…確かにそう言われると不安ね。見た感じ機械と術式の混成型のようだし、実戦で使用するのも今回が初めてだから耐久性も完璧とまではいかないかも」

「だろ？その腕輪がオシャカになったら俺等は終わりなんだから、今回は離れて俺の勇姿を見てろって」

そう言いながらダンテはいつの間にか抜いたのか、2丁の拳銃をクルクルと弄んでいた。

「…ハア、分かったわよ。それじゃあワンサイドゲームでヨ・ロ・シ・ク」

「ハイハイ」

そんな事を喋りながら、2人は炎獄と化したエルド平原に向かって歩き出した。

たった1体の悪魔の反乱により救われた忌まわしき世界。その世界に現界してから、辺り一帯を焼き尽くした1体の悪魔は考え込んで

いた。

ヤツが魔帝に反乱を起こし、多くの同胞を討った上で成り立っているこの忌まわしき世界。世界は広い、故にどこから滅ぼしてやろうかと考えていた時に、ソイツはやって来た。

正確には2人だったがこの際人間の方は関係ない。

遙か昔に我等悪魔の宿願であつた人間界の征服、それをたった1体で阻止した悪魔スパイダの魔力を感じるのだ。

多少混じってはいるが、ヤツは間違いなくスパイダの血族。

魔界でも数多の悪魔達が噂している狩人、スパイダの息子。

ああ、そうだ。とりあえずやることが決まった。

スパイダの息子を血祭りに上げよう

Truth's End of flame 前(後書き)

前編後編で締める予定です。

とにかく頑張ります!!

Truth's End of flame 後(前書き)

おじやー！…

(ゼエ、ゼエ、ゼエ)

(、、)

Truth End of flame 後

エルド平原中央

現在ダンテとジェニファーは、燃え盛る平原の中をA・D・Bシステムを展開させながらターゲットへと接近していた。

今回はA・D・Bシステムの耐久性を考慮し、装備者のジェニファーは極力戦闘には参加せず、ダンテ1人で悪魔を討伐するというプランになったのである。

隊列としてはダンテが前衛で、ジェニファーがその後ろを20メートル離れてついていく形だ。

しばらく歩いていると周囲の炎が一斉にざわめき始め、それと同じくして悪魔の強大な魔の気配が近づいてきた。

「やっと出てきたみたいね？」

「ああ。待ち兼ねたぜ」

そう言い終わるや否やダンテの10メートル先で大規模な爆発が起き、あまりの衝撃と爆風で目を瞑ってしまった。

そして爆風が収まったのを確認し、目を開けるとそこには件の悪魔がまるで王者の如く佇んでいた。

「HA！ 社長出勤とは恐れ入るぜ」

この悪魔を前にして、ダンテはいつもと同じ様子で声を上げた。対してジェニファーはというと、映像越しで見るとよりも明らかに強大な悪魔の雰囲気にもまれていた。

「ジーナ！」

「……………」

「ジーナっ！！」

「ッ！？」

「ダイジョブか？ 雰囲気にもまれるなんてらしくねーぞ？」

いつの間にか、ダンテが彼女の隣に来ていた。

「ゴ、ゴメンナサイ。…こんな調子じゃ、援護も出来そうにないわね」

「気にするなよ？ジーナは特等席で俺を見てればいいさ」

そう言ってダンテは悪魔の方へ歩いて行った。

「待っていてくれるとは、随分余裕じゃねーか？」

ダンテは悪魔と向き直ると開口一番そう言った。

「フン。脆弱ナ人間ノ雌ナド数ノウチニハイラヌ」

「そうかい？アイツも場数を踏みさえすれば、テメエなんざ楽に申しちまうくらいの實力は持つてるぜ？」

「ダトシテモ、ヤハリ人間ナドニ興味ハナイ。我ノ目的ハ貴様ダ、狩人ヨ！！」

悪魔はそう言うと、手に持った鈍器の様な大剣を振るいながらより一層強烈な炎をその身に纏った。

「H A H A H A！そりゃあれか？いかにもパワーが上がってます！、みたいなの？」

「ダメレッツ！！」

激昂した悪魔はダンテに向けて強烈な突きを放った。

「ッ！？ダンテー！！」

大剣の重量に自身の体重を乗せて放たれる必殺の一撃。

ダンテの實力ならばこの一撃を躲すことなど造作もないはずである。

しかし彼女は見てしまったのだ。

あの大剣がダンテに直撃するところを。

土煙が舞い上がる中、ジェニファーは力なくその場に座り込んでし

まった。

「ウソ、…でしょ？…ダンテ？ダンテー！！」

炎の海の中で悲哀に満ちた女性の叫びが響き渡った。

観測塔観測部隊本部

ダンテが悪魔の一撃を受けた瞬間を、観測塔に居るアークセイバー全員が目撃していた。

ソルドは拳を机に叩きつけながら吐き捨てるように言葉を発する。

「チツ！！欠片も役に立たないではないか！？やはり無名のクズハインターを彼女と共に行かせるべきではなかったのだ！！」

「そうは言ってももう遅いわい。まさかここまで弱いとは誰も思わなんだ」

アークセイバー最古参の騎士リーグルが溜め息をつきながらそう言った。

王都からエルド平原までは最低でも半日かけなければ辿り着けない程の距離がある。

加えて現在観測機から送られてくる映像は完全リアルタイムである。

つまりどう考えてもジェニファーへの援軍は間に合わないのだ。

「くそっ！！彼女が殺されるのを黙って見ていることしかできないのか??」

スクリーンに映っている映像には二種類あり、1つは突きを放ったまま動かない悪魔の映像と、もう1つは座り込んだまま動かないジェニファーの映像だ。

しかし、この映像を見ていた1人の騎士の言葉によってこの場の空気が一変した。

「ふむ、…これは少々おかしくないのではないかね？」

彼の名はビーダス《ガルゼクス》リードリツヒ。

第2の宝剣ガルゼクスを使用する灰色の長髪を後ろで1つに纏めている20代後半の男で、騎士にしては珍しい学者肌のアークセイバーである。

「何がおかしいのだ！リードリッヒ！」

「よく映像を見てごらんよ。あ、勿論悪魔が映っている方だよ？」

そう言われてアークセイバー全員が悪魔が映っている映像を見た。

「???…ドコが変なところがありますか？」

イスカが訝しげにビードラスに問い返した。

「よく見てよ。この映像はリアルタイムで送られてくるモノなんだよ？なのに何故この悪魔は突きを放った状態から微動だにしないんだい？」

僕には、どこか押し合っている様に見えるけどね？」

スクリーンに映っている悪魔は動かない。その手に持っている大剣の切っ先は舞い上がる土煙の中に突き込まれていて、未だ男の生存は確認されていないがビードラスの仮説はあながち間違っていないのではないかと、そう考えるアークセイバーがちらほら出始めた頃に土煙が収まってきた。

そしてその場に居る全ての人間の顔が驚愕に染まることになる。

エルド平原中央

おかしい

まず初めに思ったことがそれであった。

あの悪魔が繰り出した、人間ならば即死であろう突き。それが直撃するのをこの目で見たのだが、何かがおかしい。

現に悪魔は突きの体勢から身動き一つしない。まるで押し合っているかのようだ。

押し合う？

何と？

そこまで考えると、ジェニファーは勢いよく立ち上がって土煙の向こうに居るであろう男の名を叫んだ。

「ダンテ……！」

そして土煙が収まると、そこには黄金の魔術障壁を展開させて涼しい顔で大剣を受けとめていたダンテの姿があった。

「Hey! 随分哀しそうに叫んでたな?」

「ッ!? う、うっさいわね! / / / 無事なら無事って早く言いなさいよ! この馬鹿ア!」

「ワリイ x 2。驚かそうと思ったんだが、なんかジーナが予想以上に心配してたから言いだし難くってな? 勿論他意はないぜ?」

「他意があつたらアタシがアンタに引導渡してやるわよ! !」

そんな風なこの場に似つかわしくないやり取りを行なっていると、

「グウツ!? キサマア、ソノ術式ハ、マサカ! ?」

悪魔はダンテが展開している術式に驚いたのか、ほんの一瞬だけ大剣に込められていた力が弛んだ。

その隙をダンテが見逃す筈もなく、

「黙ってる！！ワン公！！」

黄金の障壁がダントの右手に収縮し、まばゆい光を放ち始めると大剣の切っ先に向けて神速の掌底を叩き込んだ。

「Release！！」

掌底が大剣に当たった瞬間、甲高い音が鳴ったかと思うと大剣を握っていた悪魔ごと吹き飛ばした。

「グオオオツ！？」

先程まで立っていた場所から約5メートルくらい吹き飛ばされた悪魔は、雄叫びのようなものを上げながら転がっていた。

そして転がり終わると、ダントを憎々しげに睨み付けながらこう言った。

「ソノチカラ、ヤハリスパーダノモノダナ？」

「だったらどうした？ワリイけど、テメエの話に付き合っ義理はねえからな？」

ダントはそう言い終わると、背負っていた大剣リベリオンの切っ先を悪魔に向

けて構えた。

対する悪魔も、まるで仕切り直しだと言わんばかりに纏う炎が勢いを増し、声を高らかにして名乗りを上げた。

「我が名ハ《ベリアル》！炎獄ノ覇者ナリ！！ベリアル 我ノ前ニ立ちフサガルワ灰塵ニ帰スルト知レ！！！」

膨大な魔力の奔流がベリアルを中心にとてつもない勢いで渦巻いている。

その凄まじさたるやさすがは上級悪魔、並の人間ならばその魔力に当てられただけで発狂してしまう程の力を秘めているが当のダンテはというと、まるでその程度かと言わんばかりに獰猛な笑みを浮かべていた。

「それじゃあ、派手に行くかア！！！」

『Trick Star！！』

指を鳴らしながらそう言うと、ダンテの足元に緑色の魔法陣が現れた。

するとダンテは、5メートル程あったベリアルとの距離を一瞬で移動し、リベリオンで左前足を力任せに斬りつけた。

ベリアルは一瞬で距離を詰めてきたダンテに多少驚きはしたものの、すぐさま反応して前足で踏みつけた。

「HA HA!! 遅いんだよ!!」

しかしダンテは瞬く間にベリアルの後ろ足の方へ回り込んでおり、袈裟斬り・斬り上げ・横薙ぎの3連斬りを叩き込んでいた。

「エエイ、チヨコマカト鬱陶シイ奴ダ!!」

今度は後ろに現れたダンテをそのまま蹴り上げようとするもまたもや一瞬で移動し躲されてしまい、ベリアルは彼の動きに翻弄されていた。

「遅い! 遅すぎるぜえ!! その程度なのか? 上級悪魔の力つてのはよう!!」

ダンテはベリアルの足元を集中的に斬りつけ、常人ならば決して言えないであろう軽口を平然とたたいていた。

「ダメレ！！デキソコナイノ半魔ノ分際ガ何ヲイウカ！！」

ベリアルも負けじと大剣を振るったり、足元を思いきり踏みつけたりしているがダンテにはかすりもしない。

「（コノママデハ埒ガアカヌ。…ナラバ！！）」

ベリアルは足元にいるダンテへの攻撃を止めると、魔力を蓄めはじめた。

ダンテは、ベリアルへの攻撃が止んだのをチャンスと受け取ったのか、比較的損傷が大きい左前足を攻める。

「~~~~ツ！Break down！！」

ダンテが繰り出した無数の刺突が、ベリアル黒々とした外皮を削っていく。

「ソノ程度ノ攻撃デ我ヲ倒セルカ！！消シ炭ニナルガイイ！！」

魔力が十分蓄まったのか、ベリアルが体が発光し出すとその体を中心に大規模な爆発が起きた。

そして爆発が収まると、そこには勝利を確信したかのように笑っている炎獄の覇者がいた。

「グワツハハハ！アツケナイナア？スパードノ息子ヨ！！」

ベリアル周囲は爆発の影響からか、一切の生物の生存を許さない焦土と化しており、ベリアル自身もこの攻撃ならばあの魔術障壁も意味を為さないだろうと考えていたので、ベリアルはダンテの死を確信していた。

「サテ、人間ノ雌ヨ。貴様ガ頼リニシテイタスパードノ息子ハ死ンダ。ナアニ、スグニ後ヲ追ワセテヤルカラ安心スルガイイ」

「プツ、ププツ。アハハハハハ」

「フフン。恐怖ノアマリ、頭ガオカシクナツタカ？」

いきなり笑い出したジェニファアの様子を眺めながら、ベリアルは残酷な笑みを浮かべていた。

「べつつに〜？ただ可笑しくって笑っちゃっただけよ。それよりい

いの？アンタの相手はアタシじゃないでしょ？」

首を傾げながらそう言う彼女の反応を見て、妙な違和感を感じていた。

まるで、あの男が生きているかのような。

「マサカツ！？」

そこまで考えてベリアルは空を見上げた。

さっきの爆発による範囲攻撃は比較的広範囲を焼き尽くすために、ベリアルに密着して剣を振るっていたダンテが如何に高速戦闘用術式《Trick Star》を使えるといっても、走って爆発の範囲から逃れることは出来ないだろう。

つまり残る可能性はただひとつ、空である。

「ソ、ソナナ！？アリエヌー！！アリエヌゾー！！」

ベリアルが見上げた先には、リベリオンを今まさに投擲せんとするダンテの姿があった。

「トロいんだよ！！ Catch This！！（これでも喰らいな）」

「Go down! (墜ちろ!)」

「グアアアア!?!」

ベリアルは、ダンテが繰り出した強烈な兜割りによって顔面から地面に叩きつけられる形になり、更に落下の勢いに乗せてもう一度繰り出された兜割りで、ベリアルの頭は地面深くめり込んだ。

「Is that all you've got? (バテたのか?)」

ダンテは、リベリオンを担ぎながらベリアルに背を向けて歩いていた。

そしてある一定の距離になると、半身でリベリオンを肩の高さに構え、左手を剣の腹に添える独特の格好をとって、刃に紅く強力な魔力を籠めながら地面を滑るようにベリアルへ接近した。
そして、

「Then down to hell you go!! (だったらそのまま寝てる!!)」

そう言うと同時に、必殺の突き《スティングー》をベリアルの脳天に叩き込んだ。

「~~~~ツ!?!」

ベリアルは声にならない悲鳴を上げながら吹き飛んでいった。

ベリアルは受け身を取って立ち上がろうとするが、体全体に激痛が走り上手く立ち上がることができない。

よく見ると、体の至る所が崩壊し始めていた。

「キ、キサマア!?!我二何ヲシタ!?!答エ口!?!」

「Huh・やだよ、めんどクセエ」

《ステインガー》とは、刃に籠めた魔力を突きと共に敵の体内に流し込むことで、異なる魔力どうしの拒絶反応を誘発させる内部破壊の技である。

炎を纏っていた状態のベリアルに繰り出しても、纏う炎が刃に籠められた魔力を阻害し、十分な威力を発揮出来なかっただろうが、現在は炎が消えているのでその威力は絶大だ。

ダンテは、説明を要求している炎獄の覇者を無視しながらエボニー

にマガジンを装填していた。

「さてと、何か言いてえ事はあるか？」

既にベリアルのはきは崩壊しており、残るは胴体から頭までである。
ベリアルは舌打ちをすると、ダンテを睨み付けながら喋り出した。

「スパイダノ息子ヨ、今ハマダ勝利ノ余韻ニ浸ッテイルガイイ。
モウ少シ、モウ少シデ我ラノ王ガヨミガエル！！」

「ふん、《王》ねえ？」

「ソウダ！！ソシテ、王ガヨミガエレバ貴様ナド一瞬d」

「あ、ワリイ。時間切れだ」

エポニーから放たれた弾丸がベリアルのはまに突き刺さると、話の途中にも関わらず残りの体が粉々に砕け散っていった。

「H A H A H A . J a c k p o t ! ! 」

エボニーをガンベルトに納めると、視界に自分の元へ駆け寄ってくるジェニファアの姿が映った。

そして彼女は走りながら大きく振りかぶると、ダンテの頬を力の限りぶん殴った。

「このバカアー！！なんでとつととトドメを刺しちゃうワケ！？もう少し情報を引き出そうとは思わなかったの！？」

まさか怒られるとは思っていなかったので、ダンテはかなり困惑していた。

「えーと、その、アレだよ。多分だけど、アイツはあれ以上有益な情報なんぞ喋らなかつたと思うぜ？」

「そんなの聞いてみなけりや分かんないでしょ！？だいたい最後のアレ、『Jack pot!』ですって？カツコつけてないでやる事やりなさいよ！！」

「グウ。…けどよ、やっぱりそういうのも大事なんじゃねえの？」

「アアン??？」

「イエ、ナンデモナイデス、ハイ」

「ハア。あの悪魔が言ってた《王が復活する》ってのが、唯一の情
報ね？」

「そうだな。まっ、そういうのは騎士団に任せるわ」

そう言うと、ダンテは炎が消えた平原を歩き始めた。

ジェニファーもダンテの隣に並んで歩き始めたが、不意に何かを思
い出したような顔になって立ち止まった。

「ねえ？ちよつと思ひ出した事があるんだけど？」

「何だよ？」

「……ベリアルが言ってた《スパイダの息子》って、どういう意味
？」

「……………」

「ダンテ……」

「…なあ？ジーナ。あの空に浮いてるやつ」

「観測機のコト？」

「ああ。アレって音も拾ってんのか？」

「いいや、映像だけだよ？」

「…そうか。なら、ジーナにだけ教えてやる。耳貸せ」

「…うん」

「（俺はな、お前等が崇めているスパイダの息子なんだよ）」

「…ふーん」

「（言うなれば、俺はテメエ等の敵である悪魔なんだよ）」

「…あつそ」

「……………それだけ??」

ダンテはジェニファアの耳から顔を離すと、なぜか呆気に取られたような顔をしながら彼女に問いかけていた。

「それだけって、何が?」

「ハア?俺は、お前等人間の敵である悪魔なんだぞ?…そりゃあ、母さんは人間だから完璧な悪魔とは呼ばねえけどよ。…それでも俺が悪魔であることに変わりにはねえのさ」

「…うん」

「だからヨオ、俺は騎士団の敵なんだから今ここで討伐しなくていいのかよ?」

「……………」

「心配すんな。抵抗なんざしねえから。…ジーナに斬られるんなら、

俺も納得できるからよ?」

そう言って、ダンテは両手を挙げて目を瞑った。

「……………いじ」

「うん?」

「見損なわないで!!」

「グハア!?!」

なぜかダンテはジェニファーに殴られていた。しかも、さっきよりもまるで勢いが無い。

「どづしたんだよ? ジーコ」

しかし、その理由は彼女の顔を見れば明らかだった。

「っ、他人（ひと）の気も知らないで、『自分を殺せ』ですって? ふざけな
いどよっ! …!」

「お、おい？ジーナ？」

彼女は涙を流し震える両手を握りしめながらも、どこか必死になつて叫んでいた。

「確かにアンタが悪魔だ、って聞いた時はちょっとだけ驚いたわよ！！だけど、ダンテが悪魔だって分かったとしても、それでアンタの何が変わるって言うの！？」

「そ、それは……」

「何にも変わらないんでしょ？だったら、……だったらダンテはアタシが知ってるダンテなんだから！！バカでお調子者で不器用で皮肉屋で優しい、デビルメイクライのダンテなんだから！！」

そう言い終わると、ジェニファーは涙を拭ってダンテに背を向けた。

「……やれやれ。参ったな、こりゃあ」

そう言うと、彼はジェニファーの隣に並び彼女の頭に手を乗せた。

彼女の肩がビクンと動いた気がしたが、この際関係無い。

「それじゃあ、まあ、その、…これからもよろしくな!」

「ツ!?!…当たり前でしょ!!このバカツ!」

そう言った時の彼女の顔は、今まで見たことのない位綺麗な笑顔だった。

Truth's End of flame 後(後書き)

… やっちまった。

けど、後悔はしていない!!

…………… 多分。

R e p o r t i n a m e e t i n g r o o m (前書き)

この回にダントテは出ません。

……出ません。

Report in a meeting room

炎獄の覇者^{ベリアル}を討伐した翌日、王都ベルガードは現在お祭り騒ぎの真っ最中である。

ベリアルを倒したのはダンテだが、無名のハンターが討伐したと報道するよりも、アークセイバー（今回はジェニファー）が討伐したと報道する方が政治的に都合良かった。

そして今回の情報操作の狙いは、国民の士気の上昇とアークセイバーの強さを国内外に知らしめ、外交をアークセイバーの武力を背景に自国にとって有利に進ませるためのものであったのだ。

ジェニファーは、昨夜エルド平原から帰還した後ダンテと別れて観測塔へと向かった。

騎士団は事の一部始終を観測機から見ていた為、ジェニファーが報告することは殆ど無いのだが、ベリアルが死ぬ直前に言っていた《王の復活》という言葉を他のアークセイバー達はまだ知らないので、少々報告に来たという感じである。

「あーあ、早くシャワー浴びたいってのに、なんで帰還したらすぐ報告に行かなきゃなんないのかしら？」

ぶつぶつ文句を言いながら観測塔内の会議室の中の1つを目指す。

観測塔内会議室

ジエニファーを除く他のアークセイバー達は、さっきまで居た観測部隊本部から塔内の会議室の1つに移動していた。

本来ならば、討伐に向かったアークセイバーが帰還するまで、報告を待つ他のアークセイバー同士による雑談などが繰り広げられているのだが、今回は誰1人として言葉を発することが出来ずにいた。

理由は簡単、先程まで見ていた映像が原因である。

唯一人の無名ハンターが上級悪魔相手に無傷で立ち回り、ただの突撃で自分の5倍以上もの巨体を吹き飛ばすでたらめな戦いを目撃してしまっただのだ。

他にも、見たことのない術式を使用していたりと、謎が尽きない存在である。

各々が物思いにふけっていると、会議室のドアをノックする音が聞こえてきた。

アークセイバー達は思考の海から引き上げられるのを感じながら、入ってくる人物に意識を集中させた。

「入りたまえ」

ソルドがそう言うと、ジェニファーがどこか疲れた様子で入ってきた。

「あゝ、づがれだゝ」

「ハツハツハ。流石に平原までは遠かっただろう？ご苦労だったね」

「他人事みたいでムカつくわね。オマケにその上から目線。だからソルドはモテるケド長続きしないのよ」

「うっ！？」

他のメンバーが心の中で思っていることを、アークセイバー歴代最強の男に直接言えるのは、世界広しと言えど彼女しかいないだろう。

「ガツハツハツハ！嬢ちゃんの前ではソル坊も形無しじゃのう？」

「リ、リーゲル殿！」

ソルドも、どうやら60歳を越えてもなお現役を張り続けているリーゲルには頭が上がらないらしい。

そんなやりとりをしていると、ソルドが1つ咳払いをし、真面目な顔になって話を切り替えた。

「ゴホン。さて、それでは報告を聞こうか？」

ジェニファーも空いている席に座ると、一呼吸置いて報告を開始した。

「えーと、今回の戦闘の報告をはじめます。負傷者、欠員ともに0。対象の悪魔は自らを《ベリアル》と呼称。《ベリアル》は民間の協力者ダンテ・レッドグレイブが単独で討伐。また、《ベリアル》が完全沈黙する直前に気になる情報を喋っていたわ」

「気になる情報ツスカ？」

そう言ったのは第4の宝剣エルドールを使用するベガ《エルドール》レムストである。

29歳だが、年下に対しても語尾に「ッス」や「スカ？」といった喋り方をする少し変わった男なのだ。

「ええ。《ベリアル》は死ぬ間際に『我等の王が復活する』と言っていたわ」

ジェニファーが言い終わると、会議室は少しの間静寂に包まれた。

まさか上級悪魔が《王》と呼ぶ存在が、そう遠くない未来に現れるだろうと、暗に知らせているのだ

しかし、その静寂は1人の騎士によって打ち砕かれた。

「…成る程ね。『復活』ってことは、その《王》とやらは封印でもされているんだろうね」

学者肌のビーダスが、数少ない情報の中からとある仮説を導きだすと、

「フム。…恐らくですが、ビーダスさんの仮説は結構的を得ている

のではないのでしょうか？」

そうアルフィードが支持するのを皮切りに、次々と他のアークセイバーがビーダスの仮説を支持し始めた。

「確かに、そう言われるとそんな気がしてきたッス」

「フウ。そういう頭を使う仕事はワシには合わんのでう。お前さんらに任せるわい」

「その線で行きましょうか」

その他のアークセイバーもビーダスの仮説を全員支持し、それをソルドが確認すると、

「よし、ならばこれからの大まかな活動方針を伝える！ビーダスはあらゆる文献、古文書などを調べて《王》なる存在を明確にしろ！」

「うん。オツケーオツケー」

「そして、その《王》の封印場所を探しだし、封印が解けかかっているのなら再封印も施さなければならぬ。その為にも、まずは場

所を特定しなければならぬ。これに関してはギルドへ依頼という形で、未だに解明されていないガルマ山脈やユガの樹海などの未開の地を探索してもらおうと思う。…何か質問はあるか？」

するとジェニファーが手を挙げた。

「私達アークセイバーは何をすればいいの？」

「我等は変わらず、王都の防衛と王都周辺に出現した悪魔の殲滅だ」

「……分かった」

「他に質問はないか？」

ソルドは周囲を見渡して、特に反応がないのを確認すると、

「よし、この話は終わりだ！……話は変わるが、ジェニファー君。悪魔を倒したのは民間の協力者だったね？」

ジェニファーは首を傾げながら、

「何言ってるの？観測機でアイツの戦いを観てたんでしょ？」

「あ、ああ。…そうなんだが。報道機関には君が『討伐に成功した』と、知らせることが決定した」

「……………ハア??？」

彼女はソルドが何を言っているのか理解できなかった。

何事実を歪曲する必要があるのか、どうして自分の功績として報道しなければならぬのか。

「…誰がそんな事を指示したの？誇り高き騎士団のアークセイバーに『偽りの功績を受け取れ』なんて、アタシを侮辱してるの!？」

彼女は怒りに全身を震わせながら、ソルドを睨み付けていた。

対するソルドも、どこか悔しそうな表情をしてしばらく黙っていたが、意を決したかの様な表情になると、こう告げた。

「……………元老院だ」

そう言った瞬間、会議室内の空気が一瞬で凍り付いた。

「ッ!?!……そう。あの死に損ないどもが、…ね？」

「お、おい？ソル坊…」

「構いませんよ、リーグル殿。元老院の指示に従う義務はありません。我等はこの国、国王陛下に忠誠を誓ったのです。元老院に誓ったのでは断じてありません」

ソルドの話の流れから推測すると、どうやら元老院が報道に関する指示を出して、そのことを他のアークセイバー達を口止めするよう仕向けていたらしい。

他の騎士達も元老院のやったことを悔しく思っているのか、皆一様に表情が暗かった。

「…フウ。皆？アタシは大丈夫だから、ね？元老院のヤツ等へ殴りかかったりなんかしないから。マジで」

虚偽の報道の話聞いた時よりも幾分怒気が丸くなったのを確認すると、会議室の張り詰めていた空気が徐々に弛んでいった。

「あ、そうだ！ジェニファーさん！」

「ん？どうしたの、イスカ君？」

「いえ。明後日の夕方6時30分から、王宮で立食パーティーが開催されるらしいんです。招待された人は、友人知人家族などの知り合いの中から1人だけ選んで、選ばれた人は特別にパーティーに参加する事ができるそうですよ？因みに僕達アークセイバーは全員招待されていますからね？」

つまり王宮と何も関係のないダンテも、一緒に連れていけるといふことだ。

「オツケー。情報ありがとう！！」

すると、彼女はおもむろに椅子から立ち上がった。

「それじゃあね？とっととシャワー浴びて寝るわ。じゃあ、おやすみ」

彼女はそう言つと会議室から出ていった。

観測塔廊下

「ハア。明日は悪魔が倒された事を王都の皆知って、お祭り騒ぎになっちゃうんだろうな」

正直、会議室に居た時は必死に気持ちを抑えていたが、やはり偽りの功績によって贈られる賞賛は我慢ならない。

前々から思っていたことだが、騎士団は自分の意志で動くことが出来ない。さらにアークセイバーともなると、出撃を申請してそれが受理されるまでにかかなりの時間がかかってしまう。

その時間のせいで、救えた筈の命が犠牲になっていくのを何度も見てきており、加えてさっきの自身の誇りを大きく傷つけられたことは、彼女にある決意を抱かせるのに十分な理由だった。

「虚偽の報告に対する責任は取らないとね」

そう言って、彼女は自分の屋敷に帰っていった。

R e p o r t i n a m e e t i n g r o o m (後書き)

眠いぜ、チクシヨウ！

ちなみに、しばらく戦闘はありません。

……………ありません。

P r e p a r a t i o n 前(前書き)

クリスマス。

1人でお祝い。

メリー、クルシミマス(笑)

Preparation 前

サトウ家のとある1室

眠い。

窓から入ってくる朝日がアタシの安眠を妨げる。

昨夜、カーテンはちゃんと閉めていた筈だ。

なら何故、今朝は開いている？

「…様！…嬢様！起きて下さいお嬢様！！」

ああ。

この聞き覚えのある綺麗な声は…。

「ふわあああゝあ。…マリ姉、あと少しだ」

「ダ・メ・で・す！もう朝食の用意はできているんですからね？

旦那様もお待ちになられていらつしやいますよ?」

マリアベル＝クラン

ジェニファーが幼少の頃から彼女の友達兼世話係としてサトウ家に仕えている人物であり、彼女が成人したその日からは屋敷のメイドとして働いているのだ。

ちなみにジェニファーよりも5歳年上なので、彼女からは実の姉のように慕われている。

それからこれは余談だが、短く切り揃えられた金髪がよく似合う美人である。しかし、ジェニファーの稽古相手を務める程の実力者なので、マリアベルに想いを寄せているであろう男性の方がその強さに気後れしてしまい、彼女は未だ独身である。

「……でもまあ、昨日お嬢様が成し遂げた偉業を考慮致しますと、眠いのも幾分仕方のない事かもしれませんが……」

「?……………ああ、《ベリアル》の事ね?」

「はい。新聞は何処も一面お嬢様の事が書かれていますし、テレビもおそらくは新聞と同じような内容が放送されているでしょう」

「……………」

「お嬢様？」

「…ああ、ごめんネ。それよりもマリ姉？2人の時は畏まった口調で話さないでって、前に注意しなかった？」

「あら？ゴメンナサイ。メイドやってると、どうしてもこうい話の方が癖になっちゃってね。次からは気を付けるわ」

そう言いながら軽くウィンクする姿は、女である自分から見ても中々魅力的である。

…彼氏がないのがまるで嘘のようだが。

「~~~~ツ。さて、起きますか!?!」

ジェニファーは軽く伸びをすると、ベッドから起きだしマリアベルが用意していた服に着替えた。

水色のワンピースに白のパンツ姿という、シンプルだが彼女にとても良く似合った私服である。

何故私服なのかというと、アークロム王国にはアークセイバーが上

級悪魔を討伐した翌日は《征魔の休日》という祝日へ置き換える風習があり、今日彼女は休みなのだ。故の私服である。

もちろん、両腰には2本の宝剣を差しているが……

そして、ジェニファーはリアベルを引き連れて部屋を出た。

大広間への道すがら、リアベルはジェニファーを質問攻めにしていた。

やれ《ベリアル》はどれくらい強かったか、やれアナタはどうやって倒したのか、やれ今回はe t c / e t c。

ジェニファーは、リアベルの質問を適当に流しながら《ベリアル》《討伐の真実を、彼女や父親に明かすべきか迷っていた。

騎士道に厳格な父は、《ベリアル》討伐の真実を明かせば怒り、その元凶たる元老院を厳しく追及するだろう。

しかし元老院の勢力が未知数な今、下手に手を出せばサトウ家は没落、最悪の場合国家反逆罪の濡れ衣を着せられる事になりかねない。リアベルに話すにしても、彼女は優しいので自分の話を親身になって聞いてくれるだろう。そして、自分と同じように心を痛めてしまっだろう。

そうになると、やはり思いつくのは1つの方法しかなかった。

「ちょっと、お姉さんの話聞いてた？」

「へ？な、何のこと？」

途中から考えるのに夢中になってしまっていたようで、ベリアルの場合から後の会話はまったく頭に入ってこなかった。

つまり、ついさっきまでマリABELが話していた内容は皆目見当がつかない。

「まったく。ほら、もうすぐ大広間よ？って言ったの」

「あはは。ゴメンねマリ姉？」

「ふふつ。気にして無いわよ。それじゃ、私は屋敷の掃除があるから」

そう言うと、マリABELは手を振りながら来た道に戻っていった。

「さてと。気を取り直してゴハンゴハン」

そして、ジェニファーは大広間へと通じる扉へ向かって歩きだした。

Devil May Cry

現在、ダンテは電話で話している最中である。

電話の相手は、王都に工房を開いてる鍛冶職人の中で唯一、対悪魔用の銃器をオーダーメイドで造っている変わり者《Judgment Bullet》オーナー兼従業員の、カーネル「リビンゲストン」その人だった。

「おいおい？ソイツあ幾らなんでもぼったくりだろう？」

『ハンツ！この値で納得しなけりや諦めな！！素材だって半端なもの使っていないじゃ！！』

「この値段だと、俺の生存にダイレクトで関わって来るんだよ。…もう少し、もう少し安くしな」

『その理屈が、お前さんだけに通用すると思うなよ？』

「チイツ！！！」

『…お前さん、交渉する気はあるのか？』

ダンテはそれから暫く考えていたが、現金を工面する良い案が見つからなかったので、実際に現物を見てから考えることにした。

「まあいいか。取り敢えず見せるだけ見せてもらっぜ?」

『…期待せずにまっとなるわい』

「ああ、期待してまってる」

そう言っで電話を切ると、ダンテは支度を始めた。

エボニーとアイボリーの残弾を確認し腰のガンベルトに納めると、机に乗っている今朝の新聞に目移った。

「《ヴェルヴォルン卿、単騎で炎獄の悪魔を撃破!》、か。…こりゃ何かあるな?…俺には関係ないが」

そう言っで、ダンテは銃のみを装備して事務所を後にした。

王都商業区

現在ダンテは商業区の1番端を歩いていた。

アークロム王国に居る武芸者の多くは剣や斧などの近接系統の武器を好んで使う傾向がある。
所謂、剣尊銃卑である。

武芸者の経済的な都合からも、剣などの近接武器は使い方次第で消耗を抑えられるから、というのがそう思われている主な要因なのだ。他にも剣やランスといった比較的長い得物は、術式を刻み込める場所が多いせいか、様々な効果を付与することができるのも理由の1つだが。

その点、銃は弾丸を常に消費し続け、弾に刻める術式も少なく、何より1発1発術式を刻まなければならないため、その費用が馬鹿にならない。
弾だけならばまだ大丈夫なのだが。

暫く歩いていると、お世辞にも綺麗とは言い難い工房が見えてきた。

「おい爺さん!!遠路遙々来てやったぜ!?!」

「やかましいわい!店先で騒ぐんじゃない!?!」

「テメエが1番騒いでんだろーが」

そんなやり取りをしながら工房に入ると、一際大きい作業台があり、そこには2丁の銃が横たわっていた。

1つは大型のリボルバーなのだが世にも珍しい縦列2連装型の銃と、コンパクトだが大口径の並列2連装型のショットガンである。

「どつじゃ？ワシ会心の作品は？リボルバーの名は《ブルーローズ》、こつちは《アニヒレイト》じゃ」

「へえ〜。触っていいか？」

「…好きにせい」

ダンテは、2丁の銃を交互に持ち換えながら、重さや手に持った感覚を確認していた。

クルクル回したり、装填の仕方を確認したり。

最初は思案げな顔をしていたダンテだったが、時間が経過すればする程彼の表情は嬉しそうに変わっていった。

「おい爺さん！！アンタやっぱ天才だぜ！！勿論弾は別々だろ？」

「うん？ま、まあな／＼／」

そう言うカーネルは少し照れている様に見える。

自分の技術を認めてくれている唯一の上客から天才と言われれば、如何にカーネルと言えど嬉しいのである。

すると突然、辺りを魔の気配が包み込んだ。

「お、おい？コイツは……」

どうやらカーネルも、周囲の空気が変わったのに気がついたようだ。

「どうやら、チョットした団体さんのお出ましみてえだ」

「…悪魔か？」

「まあな。…何、すぐ終わるさ？ソイツ等使っていいならな？」

ダンテが指差した先には、《ブルーローズ》と《アニヒレイト》がある。

カーネルは少し考える素振りを見ると、盛大な溜め息をつきながら、

「…仕方ないか。《ブルーローズ》と《アニヒレイト》の弾薬は使った分も合わせて請求するからな？」

「チイツ！アンタ、太っ腹って言葉を知らねえのか？」

「ワシは痩せとるわい！そんなどうでもいい軽口叩いとらんで、早く片付けてこいッ！！ソイツ等の試運転も兼ねてな！！」

カーネルはそう言って工房の奥に下がっていった。

「そうだな。それじゃ……」

「Time to rock!! (派手にいくぜ!!)」

ダンテは工房から勢いよく飛び出した。

Preparation 前(後書き)

コイツが今年の書き納めになりそうです。

この作品を読んで下さった方々。

並びに、感想を書いて下さった御三方。

来年も頑張って更新していきたいと思っているので、応援よろしく
お願いします!!

それではよいお年を。

メリークリスマス!!

Preparation 中(前書き)

明けましておめでとございます！

なんか正月ボケっとしてたら文がまとまなくて、更新が遅びてしまいました。

申し訳ないツス！！

P r e p a r a t i o n 中

《Judgement Bullet》店先

「BLAM!BLAM!BLAM!」

「HA HA!歯応えねえなあ、クズ共!」

ダンテは、ブルーローズで3体の《スケアクロウ》の頭を吹き飛ばしながら、2丁の性能を確かめていた。

「（驚いたな。ブルーローズは魔力を籠めなくても下級悪魔程度なら殺せる威力。アニヒレイトは散弾が散らばる角度が目測で90度強。至近距離の威力はリベリオンと同程度か。……あのジジイ、トんでもねえ物作りやがって）」

自身の心の中でそう呟きながら、ダンテは獰猛な笑みを浮かべていた。

彼が使うエボニーとアイボリーもカーネルの自作であり、市販の拳銃とは比べ物にならない程の威力だが、その中でも連射性能に重点を置いているため一発の威力は低い。

しかし、今回製作を依頼したブルーローズとアニヒレイトは遠中近全ての距離で高い攻撃力を発揮できるため、ダンテが笑ってしまうのも無理は無いくらいの性能である。

そんな2丁の銃を笑いながら見ていると、

「K e h y a h y a h y a h y a !」

「H y a k h y a h y a h y a h y a !」

ダンテの両脇から2体のスケアクロウが奇声を上げながら飛び掛かってきた。

ダンテはスケアクロウよりも高く跳躍してそれを躲すと、自身の真下に向けてブルーローズを構え、紅い魔力が籠もった2発の弾丸を射出する。

それが2体のスケアクロウに着弾して小規模の爆発を起こすと、ブルーローズを左腿のホルスターに納めながらアニヒレイトで空中から周囲のスケアクロウへ散弾をばらまく。

「おとなしくしてろッ!」

アヒレイトをヌンチャクのように振り回しながら銃撃し、全方位から迫ってくるスケアクロウを足止め。

弾が空になると同時に着地し、直ぐに右腿のホルスターへ納め周囲を見渡す。

「Huh…、あんまり減った気がしねえな。撃ち放題なのはいいがこれ以上金が懸かると晩メシが食べねえし、最悪この2丁を引き取れなくなっちまうからな。……剣持って来りやよかつたか……な？」

そこでスケアクロウを見渡しながら、ダンテはある結論に至った。

「テメエ等、……良いモン《剣》持ってんじゃねえか」

ダンテは、スケアクロウの腕に付いている剣を見ながらそう言つと、比較的包囲網が薄い方向へ走りだした。

そのまま最前列のスケアクロウへ肉薄すると、ソイツの頭を踏み台に包囲網の外へ向かつて数体のスケアクロウの頭を飛移る。

無事に包囲の外へ出ると、一番外側に居たスケアクロウから剣を奪いながら蹴り飛ばし、蹴り飛ばされたスケアクロウが2、3体を巻き込んで倒れこんだ。

「H A H A H A！トロいつたらねえなあクス共！鉛弾はテメエ等
やあ勿体ねえんで、コイツ《剣》を使わせてもらっぜ！！」

そう言うと、ダンテは奪った剣を片手に外側のスケアクロウ達に斬
り掛かっていく。

バシュッ！

ズバツ！

「G y u r r o o o o o !」

「G y y a a a a a a !」

「チイツ！ナマクラ1本じゃ時間がかかるな。…ジーナ宜しく二刀
流でいくか？」

彼は持っている剣に魔力を籠めると、手近なスケアクロウ目がけて
投擲。

ブーメランの様に回転しながら、数多のスケアクロウを斬り刻むソ
レに追隨するかの様に前進し、崩れ落ちるヤツ等から剣を奪いつつ
数体のスケアクロウに斬撃を叩きこむ。

そして投擲した剣が10数体のスケアクロウを斬り刻んで戻って来

ると、ソレを左手で掴みながら左にいるスケアクロウを斬り払った。剣が2本揃ったそれからのダンテは、双剣士も真つ青の剣捌きだった。

右剣を袈裟懸けに振り下ろすと、その勢いに乗りながら左剣による回転斬り。

左剣で斬り上げると、回転しながら右剣を使い下段斬り払い。

右剣と左剣で対象を挟み込む様に繰り返される斬り払い。

そのどれもが流麗かつ強力な斬撃であり、ダンテの魔力を纏った仄かに紅い2本の剣が周囲の悪魔に死を振り撒いている。

「Die! Die! Die!!」

ダンテの乱舞は近づくスケアクロウ全てを斬り刻み、遠くにいる悪魔には紅い斬撃が飛来し、スケアクロウ達はただ1人の男に蹂躞されていた。

そして現在、大量にいた悪魔達はその数を瞬く間に減らし、残り2体のスケアクロウを残すのみとなっていた。

辺りにはついさっきまで動いていた悪魔の残骸で埋め尽くされており、その中心にダンテが2本の剣を携えて立っている。

残された2体のスケアクロウは、フラフラしながらゆっくり近づいて来るが、

「Finish!!」

ダンテは2本の剣を同時に投擲し、2体のスケアクロウを同時に沈黙させた。

「ダンテっ!!」

「あ?…Sorry pal, we're closed. (悪いね相棒、閉店だ)」

「ハア、ハア、……何が閉店よ……折角銃声聞いて、走って、来たつてのに」

ダンテの傍に駆け寄ってきたジェニファーは肩で息をしており、額には汗をかいている事からかなりの距離を走ってきたのだろう、前屈みになって必死に息を整えている。

その際に、彼女の豊かな胸の谷間が見えてダンテが心の中でガッツポーズをした事は誰も知らない。

「フウ。…で？アンタは何で悪魔と戦ってたの？…依頼？」

「いや。カーネルのジジイに頼んでた新しい銃が完成した、っつー連絡を今朝聞いてな。受け取りに来たらヤツ等と鉢合わせしちまったんだよ」

「……それって偶然だと思う？」

「さてね。狙われる理由に心当たりがあり過ぎるからな、考えるだけ無駄ってモンだ」

「あっそ」

「そうそう。…それにしても、その服にヴェルとヴォルンは似合わなさ過ぎだろ。折角似合ってるのに両腰の剣でプラマイゼロだ」

「うっさいわね。騎士は休日だろうと帯剣の義務があるって事ぐら

「い知ってるでしょ？アタシだって久しぶりに私服が着れるつてのに、誰がすき好んで剣を腰にぶら下げなきゃいけないのよ！だいたい」

「Stop!分かった、分かったから。愚痴なら後でゆっくり聞いてやるから。今すぐは勘弁してくれ、な？」

「……そう？じゃあ後でタップリじっくりネットリ話してあげるから覚悟しときなさい……今夜は寝かさないわよ？」

「徹夜は勘弁してくれ。つーか、どんだけ溜め込んでんだよ？俺の他にテメエの愚痴聞いてくれるヤツはいねえのか？」

「フンツ！アタシは《凛々しく賢いアークセイバーの紅一点》で通ってるの！愚痴なんて言える訳ないでしょ？」

「《凛々しく賢い》だと？確かに馬鹿じゃねえが、凛々しいかどうかは疑問が残るな。まあ、騎士やってる間は本性がバレねえように気をつけるこつた。詐欺罪で訴えられても俺は知らん」

「そんな薄情な…。アタシ達、一夜を共に過ごした仲でしょ？」

「ジェニファーは科をつくってダンテの右腕に抱きつき、上目遣いで

彼を見ながらそう言った。

王国の男性が見たら確実に卒倒するであろう光景であり、抱きつかれているのが他の男性であればその男性は確実に悶死するような状況なのだが、

「ハイハイ。確かにそんな事もあったな。言葉通りの意味だが」

「む、むう。…抱きついてあげてんのにその反応はどついつこと？
もつとこつ、慌てたり、照れたり、何かないわけ？」

「感想が欲しいのか？だったら、……………胸、デカくなつて」

「死ねえ!!! / / / / /」

「グハア!?!」

至近距離から放たれたボディブローがダンテに直撃し、彼はその場に踞った。

直前まで抱きつかれていたので避けることもできず、ほぼ不意打ちのソレの威力は筆舌に尽くしがたい。

「お、お前。い、色々、理不尽、だ、ろ」

「フンッ!」

そうこうしている内に周囲の商店を悪魔から守っていた簡易障壁が解除され、避難していた商人や客達が警戒しながら外に出て来始めていた。

勿論カーネルもその中の1人であり自分の店から出てきていたのだが、ちょうどジェニファーがダンテにボディブローを叩きこむ瞬間を目撃してしまい、どうやって声をかけようか悩んでいた。

しかしダンテは躡り、ジェニファーはソップを向き、まるで話が進展しないようなので、カーネルは渋々彼らに声をかけた。

「ハア……、痴話喧嘩もほどにせんか。話が進まんぞ」

「ああん? 痴話喧嘩って、誰と、誰がしてるって?」

「お、おい、ヴェルヴォルンの嬢ちゃん。性格が、性格が変わってるぞー!」

「ダ・レ・の、性格が変わってるってえ? もう一度言って下さる?

クソジジイ」

「（クソジジイで…）ス、スマンのう。痴話喧嘩、は余計だったな？ま、まあ、人通りも多くなり始めたようだし、ワシの店の中で話さんか？茶でも出すぞ？」

カーネルの提案にジェニファーはほんの少しだけ考える素振りを見せると、彼女はその提案を了承した。

これ以上この通りに居たら嫌でも注目されるだろうし、只でさえ昨日の今日で王都はお祭り騒ぎなのだ。

国民は昨日の討伐における真実を知らないため、街中で彼女を見かけたらこぞって誉め讃えに来るであろう事は容易に想像がつく。

そうなるに折角の休日が賛辞を受け取るだけで終わってしまう。それは彼女にとっても都合が悪いので、カーネルの提案を直ぐに了承したのだった。

「ほら、アンタも行くわよ？…いつまで踞ってんの？」

「誰の所為だ！誰の！！」

ダンテは膝をガクガク揺らしながら立ち上がると、ジェニファーの背中を睨み付けながら産まれたての子鹿みたいについていった。

「ほら、茶だ」

この工房の主であるカーネルはテーブルに3つのコップを置きながらそう言った。

「あ、ありがとうございます。…さっきはその、少し興奮しちゃって心にも無いことを言っちゃったというか…ゴメンなさい…！」

「うん？あ、ああ、気にすんな嬢ちゃん。ワシも何か余計なこと言った気がするしのう。お互い様じゃて」

「アハハハ、…どうも」

「…で？ジーナは俺にも何か言うことがあるんじゃないかねえのか？」

ダンテはジーナにジト目を向けながら口を開いた。

対するジェニファーは両手を合わせながら、

「ゴメンゴメン。カッとなっちゃって、つい…ね」

「ウインクで誤魔化そうだったって、そうはいかねえぞ！！だいたい、つい、ってなんだ？ついつって？一般人がアレ食らったら内臓破裂じや済まねえ威力だったぞ？もう少し真面目に謝れねえのか？」

「ちゃ、ちゃんと謝ってるじゃない！っーかアンタも謝んなさいよ
「！」

「何で俺が謝らねーといけねえんだ！」

「なっ！？アンタ、自覚無いの？」

「何のことだよ、何の」

「~~~~っ！！…ア、アタシの胸が、お、大きくなっただって言った
じゃない／＼／」

「??？ つまり、何だ？」

「…………セクハラ／＼／＼」

「…………お前って、案外おぼこっぽいのな？」

「一言余計だつてば。…………とにかくアンタも謝って！！」

「…分かったよ。…………悪かったな、変なコト言って」

「アタシもやり過ぎたわ。…ゴメン！」

そんなやり取りをしていると、彼等の横からわざとらしい咳払いが聞こえてきた。

「ウオツホン。…もういいかのう？こっちは銃と弾丸の代金さえ貰えれば用件は済むんだがな」

「そう言えばそうだったな。で、総額いくらなんだよ？俺としては結構弾の消費を抑えたつもりなんだが…」

「ああ。確かに、ワシが予想していた弾数よりも遥かに下回っておるわい。流石ダンテ、と言った所か」

「まあ、当然だな。なんなら値引きしてくれたって構わないんだぜ？」

「……………」

「冗談だよ。睨むな睨むな」

「まったく……………」

カーネルは溜め息をつくど、自身の懐から一枚の書類を取り出した。

その書類には、銃・使用した弾丸・購入する弾丸の合計金額が書かれていた。

その書類を受け取りながら、ダンテはそこに書かれている金額を確認すると一気に顔を顰めてしまった。

「……………0が1つ多いのは俺の気のせいかな？」

「いや、合つてるぞ」

そこに書かれていた金額は、電話で聞いた金額よりも明らかに増えていた。

「オイ、なんで増えてんの？今朝聞いた金額より桁が1つ増えてるつて、一体どういふぼったくりだよ！？」

「スマンのう。どうやら寝ぼけとったらしくてな、間違えてしまつたようじゃ」

「マジかよ……金足りねえぞ？」

ダントは書類を見ながらしばらく唸っていると、意外な所から助け船が出てきた。

「アタシが払ってあげようか？」

「「ハ??？」」

「だ・か・ら、アタシが肩代わりしてあげるって言ってるの!」

「Re・Really?」

「そう言ってるじゃない?それに、アタシはアークセイバーだからお給料だってスゴいのよ!」

彼女は胸を張りながら自慢気にそう言つと、ダントテから書類をひつたくり金額を確認して財布から一枚のカードを取り出した。

「ブ、ブラックカード…」

「ハイこれ。一括でお願いね?」

「ああ、すぐ終わる」

カーネルはカードを受け取ると工房の奥へ消えていった。

「悪いな？関係ねえヤツに払わせちまってよ」

カーネルが奥へ消えると、ダンテはおもむろに口を開いた。

「フフン 気にしなくていいわよ？だって、アタシがタダであんな大金を肩代わりするなんてアリエナイから」

ジェニファーはテーブルに肘をつき、意地の悪そうな笑みを浮かべながらそう返した。

対するダンテも肩をすくめながら苦笑しており、この返しは想定内、といった所の様である。

「で？何が望みなんだ？」

「えっと、実は明日、王宮でパーティーが開かれるんだけど、アタシと一緒に出席してくれない？」

「ハア！？俺は平民だぞ？大体、そういうモノって招待されたヤツしか参加出来ない類いのモノじゃねえのか？」

「それなんだけど、明日のパーティーに招待された人は、貴族平民関係なく唯1人だけ自由にパーティーへ誘って良いらしいの！勿論参加費は無いし、お料理も食べ放題。…どう？」

「タダ飯が食えるなら断る理由が無いな」

「ハイハイ。それじゃ、コレが終わったらアンタのパーティー用の礼服を買いに行きましょ？そういうの持って無さそうだし」

「…色々失礼だな。それくらい持ってるさ」

「へえ〜？それは重畳」

「…ったく」

そうこうしている内に、カーネルが頭を掻きながら戻ってきた。

カードと二枚の書類を持ちながら。

「いや〜遅くなってスマンのう。今までカードを使う客はおらなんだ。扱いにてこずってしまっただわい」

そう言いながらカーネルは自分の椅子に座ると、カードと1枚の紙をジエニフアーに渡した。

「あ、アタシのサインですね？………よしっ！」

差し出された紙にサインを書いてカーネルに渡すと、もう1枚の紙を手渡された。

「はいよ。コレが本人控えじゃ。無くさんようにの？」

「ええ、勿論」

控えを大事にしまうと、それを合図と言わんばかりにダンテとジエニフアーは席を立つ。

「それじゃあ、私達はこれで。お茶、ありがとうございました」

「ジジイ。弾が無くなったらまた来るぜ」

「ガッハツハ。今度はお前がちゃんと払うんだぞ？」

「…分かってるよ。じゃあな」

そう言っただけ等はカーネルの工房から出ていった。

「…そういや、昨日のアレ。ジーナが一人でベリアルを倒した事になってるみてえだが、一体どうなってんだ？」

「……やっぱり気になる？」

ジェニファーは俯きながらそう答えた。

今日、彼女の一番の目的は、銃の代金を肩代わりすることでも、パーティーに誘うことでもない。

昨夜の騎士団への報告の際に知らされた真実。そして、自身がこれから何をしようとしているのかを、ダンテに聞いてもらったために会

いに来たのである。

「…詳しい話は事務所の中で、ね？」

「フウ。…やれやれ」

さっきまでの雰囲気は嘘のように暗くなり重い空気を纏いながら、
2人は並んで《Devil May Cry》へ歩いていく。

Preparation 中(後書き)

……まさか、前中後編の3つになってしまつとは…。

不覚!!

(

;))

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896u/>

Devil May Cry another story

2012年1月13日02時45分発行